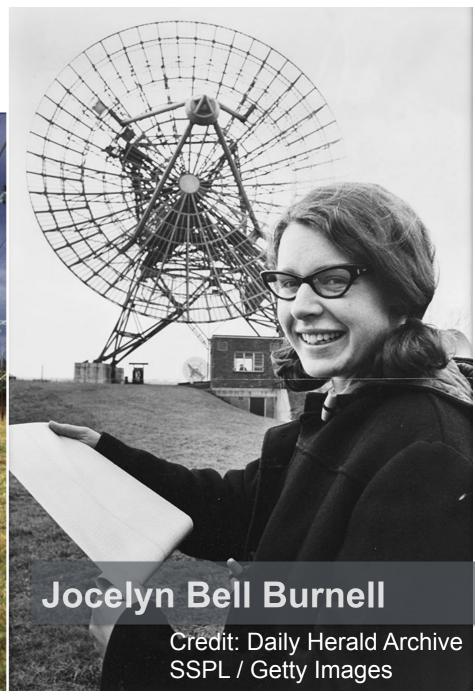
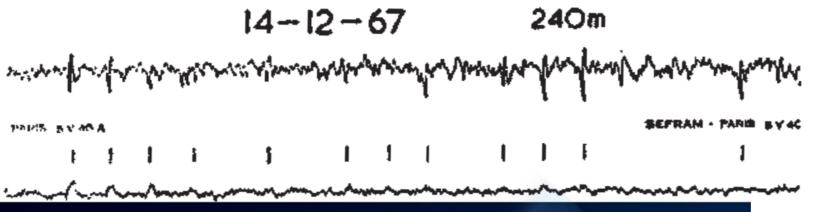
磁場の強い中性子星のX線観測

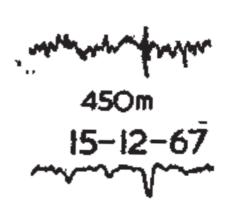


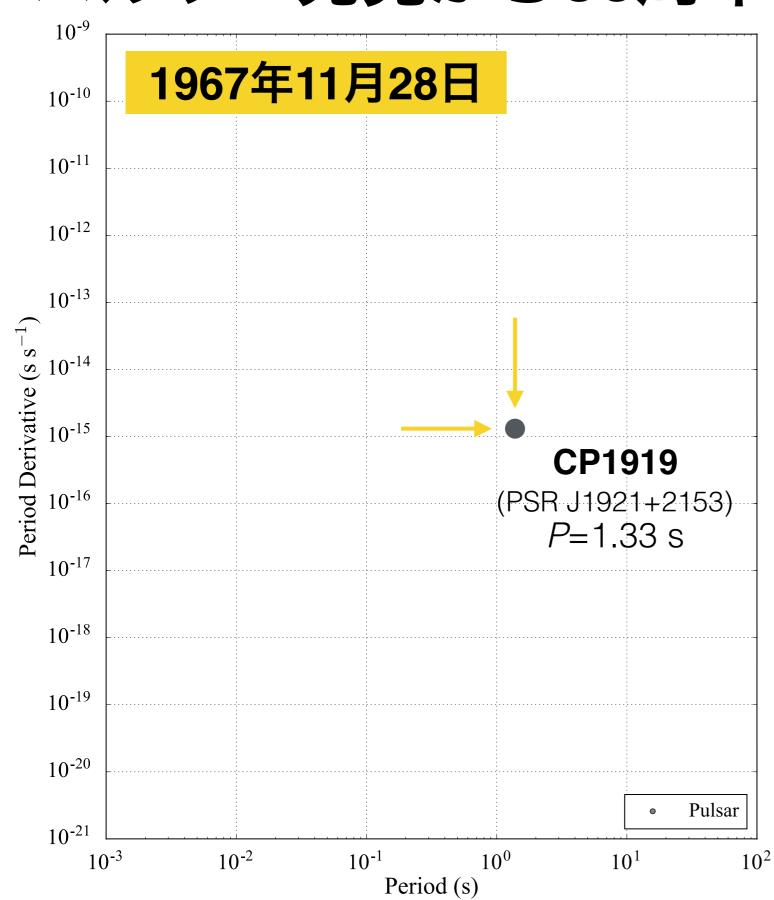
1967

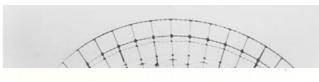




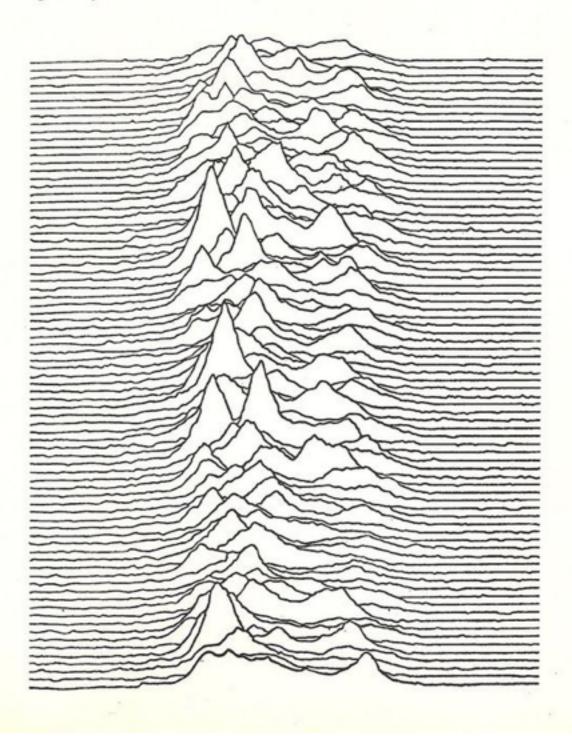


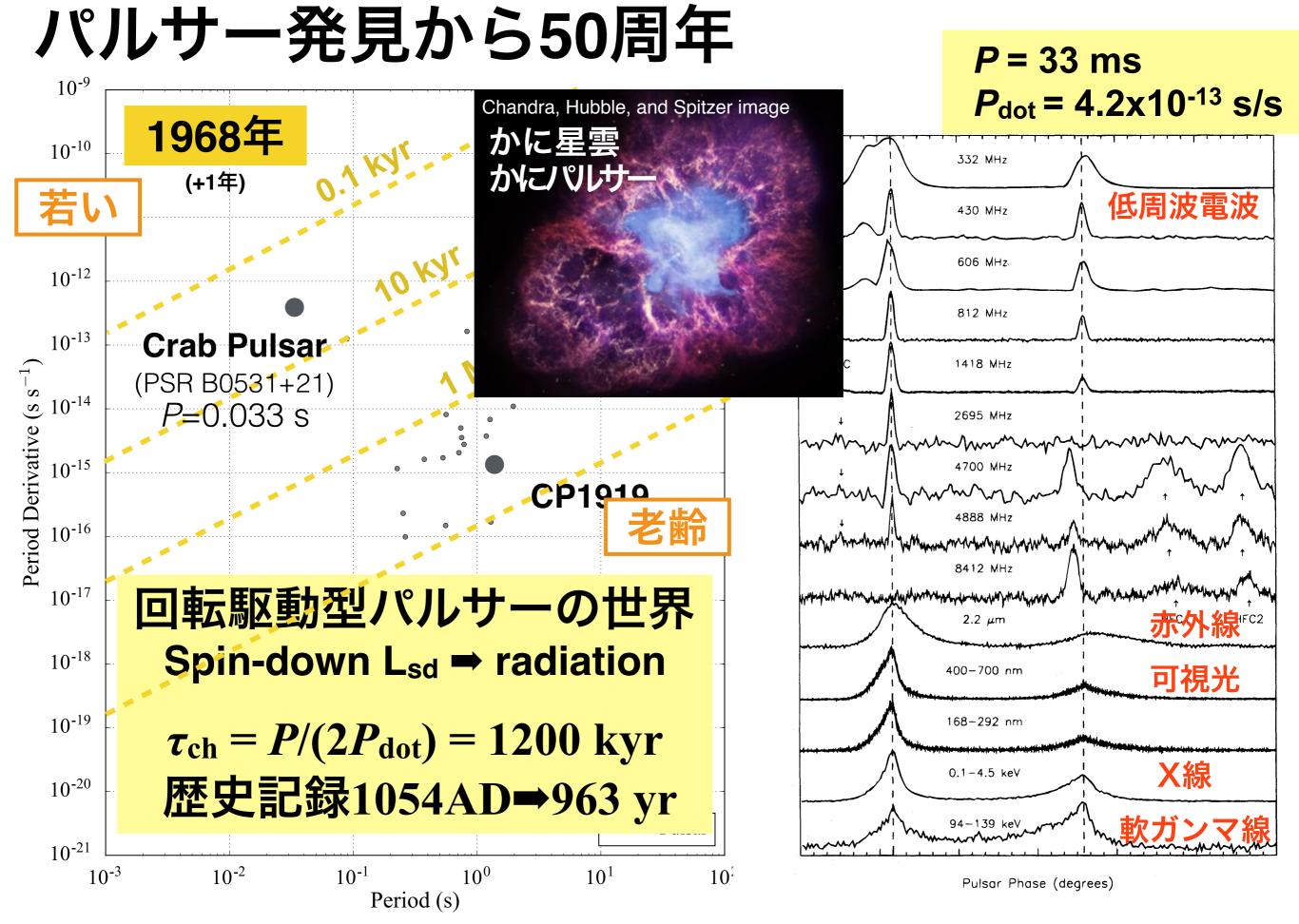




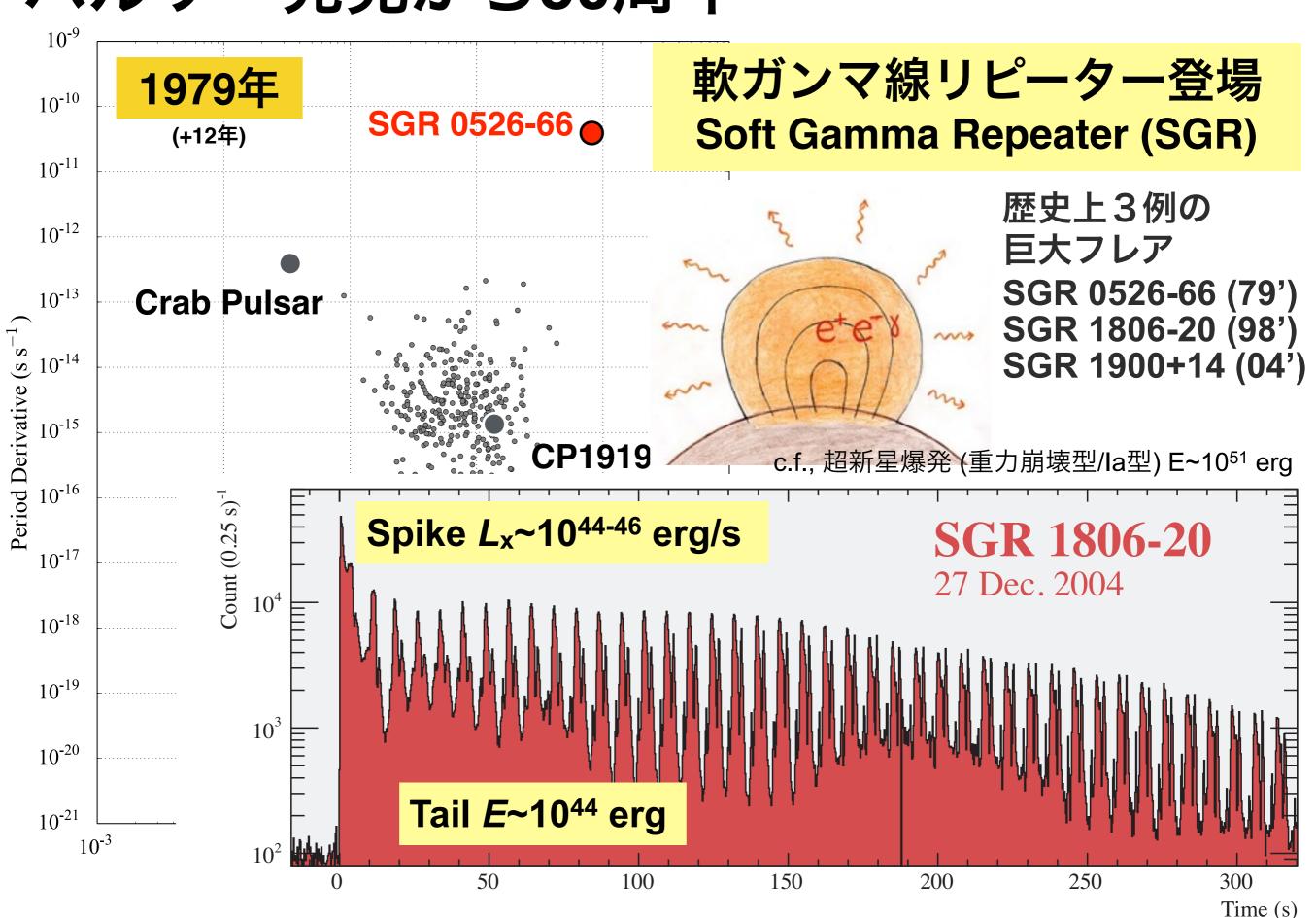


6.7: Successive pulses from the first pulsar discovered, CP 1919, are here superimposed vertically. The pulses occur every 1.337 seconds. They are caused by a rapidly-spinning neutron star.

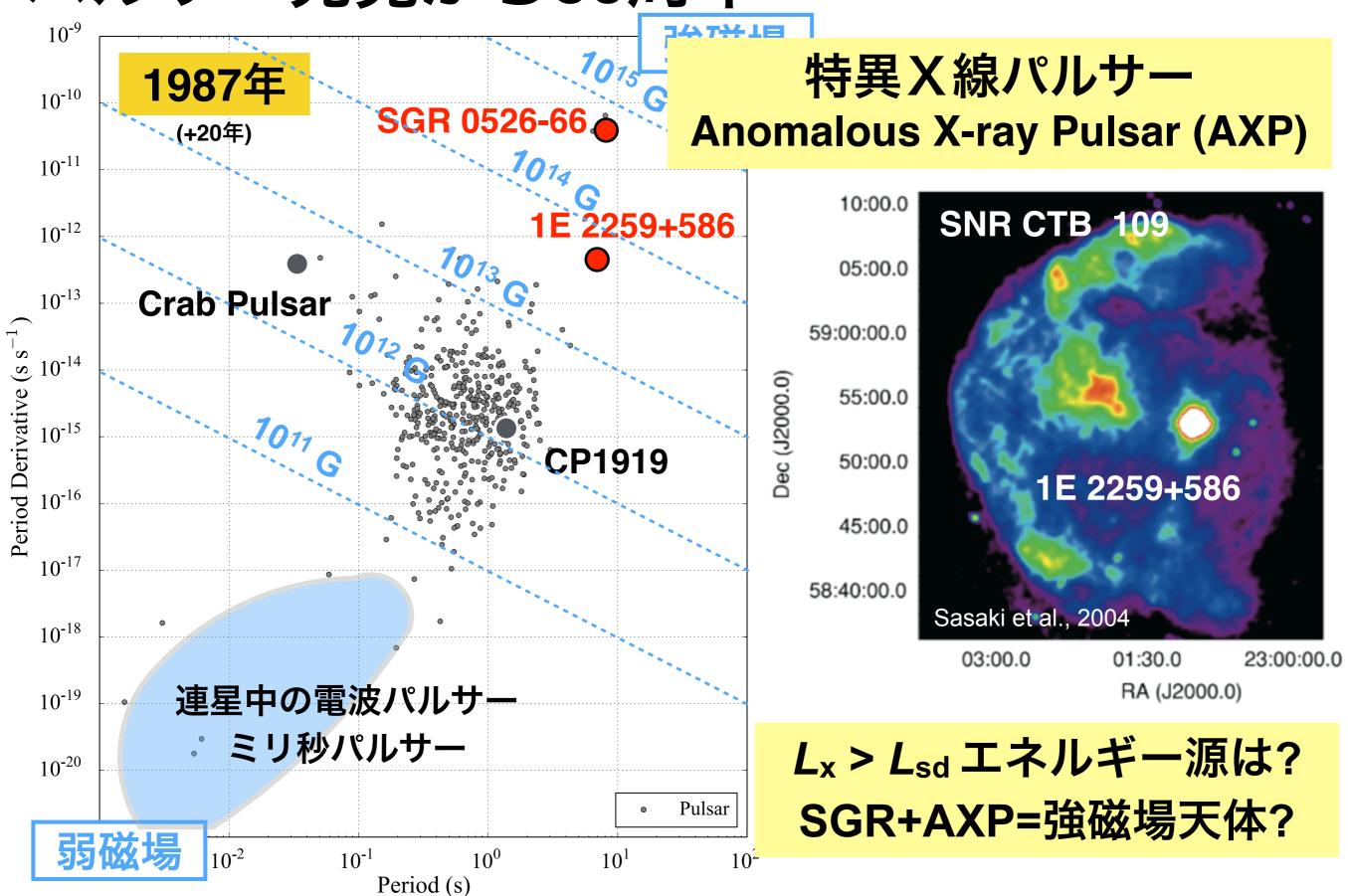




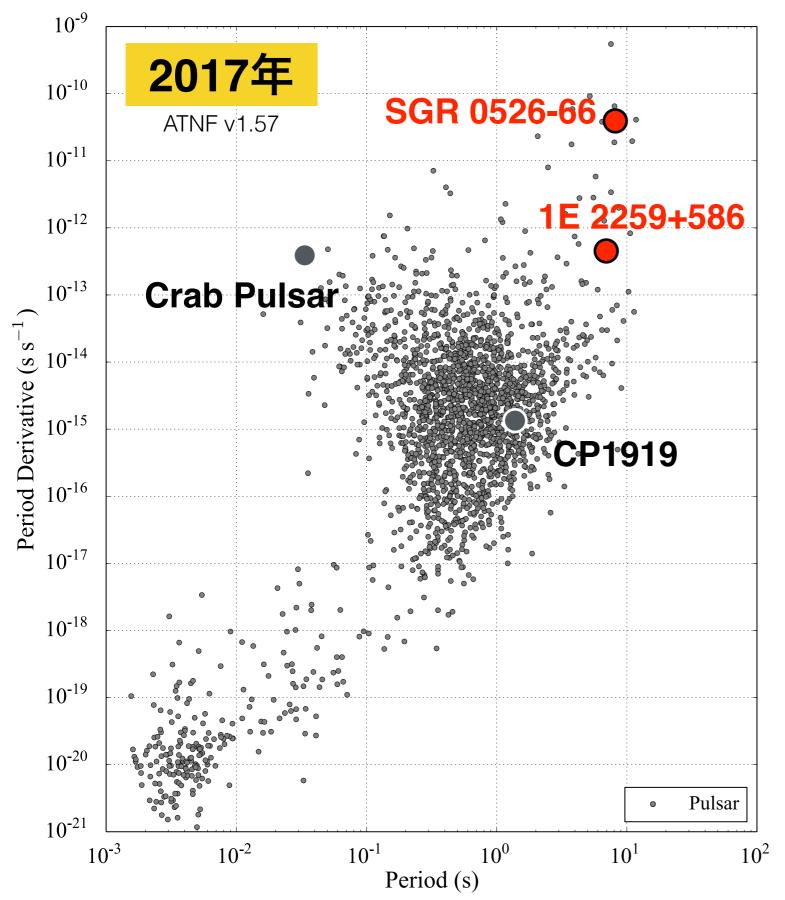
David A. Moffett et al., ApJ **468**, **779-783** (1996)

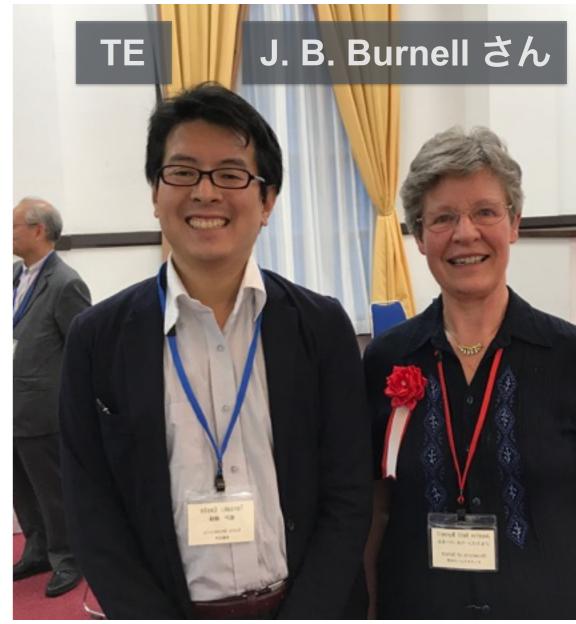






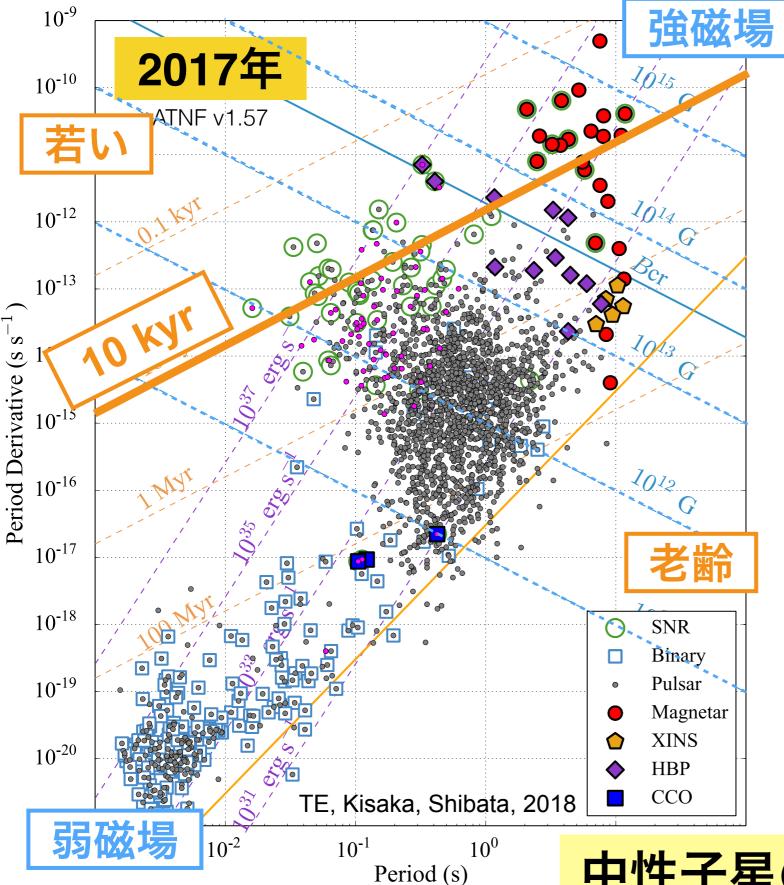
パルサー発見から50周年→多様な中性子星





2500 (銀河系には 10 可視光 ~20 天体, X線 ~100 ガンマ線 ~200

パルサー発見から50周年→多様な中性子星

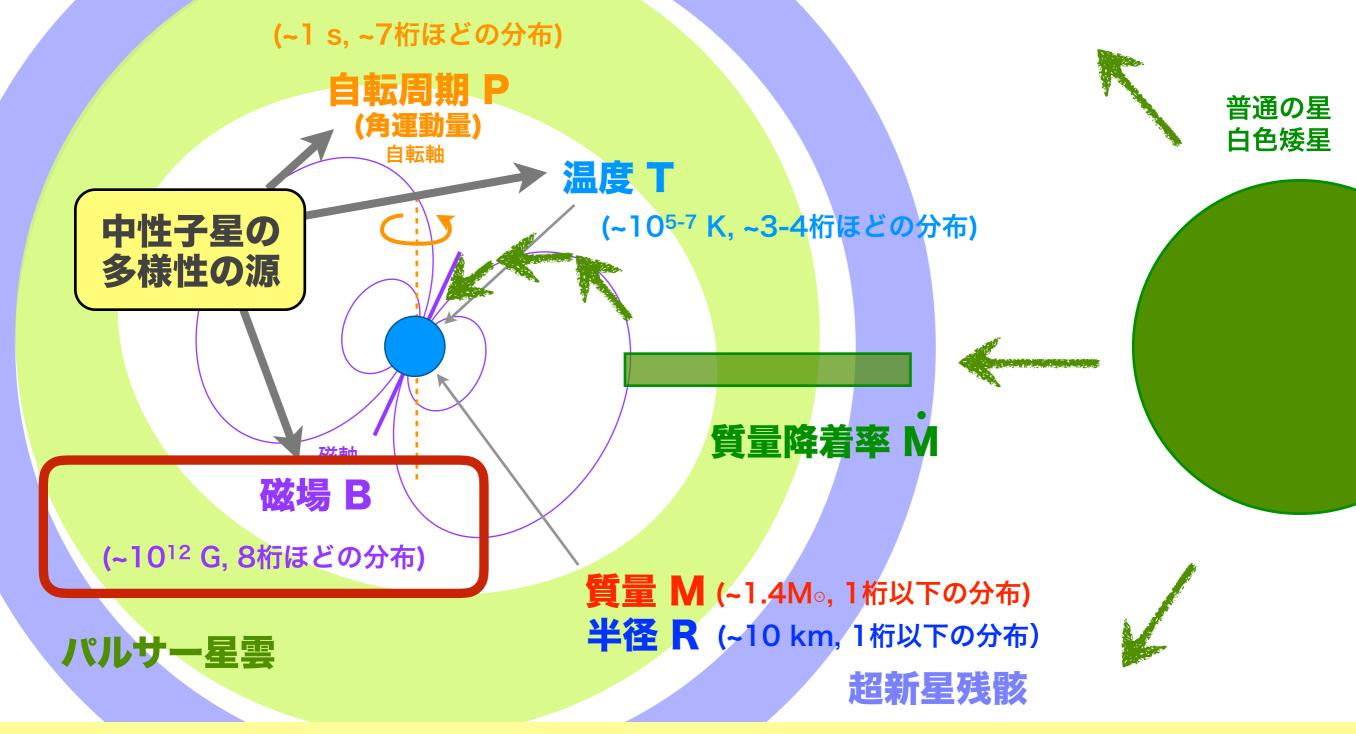




2500 (銀河系には 10 可視光 ~20 天体, X線 ~100 ガンマ線 ~200

中性子星の進化と多様性の解明へ

中性子星の観測的な物理量



中性子星の基本的な物理量の違いに加え、周辺環境との相互 作用で多様な系が現れる = 動物園 (Neutron Star Zoo)

中性子星の放射エネルギー源

回転エネルギー: 非熱的な放射

大多数の電波パルサーや一部のミリ秒パルサー

スピンダウン光度

 $L_{\rm sd} \propto d(I\Omega^2/2)/dt$

$$L_{\rm x} = 6.4 \times 10^{35} \,\mathrm{erg \, s^{-1}} P_{1 \, \rm s}^{-3} \dot{P}_{10^{-11} \, \rm s/s}$$



X線連星での明るい放射(複数のサブ種族)

降着での重力エネルギー解放

 $L_{\rm x} = GM \triangle M/(R \triangle t)$

$$L_{\rm x} = 0.98 \times 10^{35} \, {\rm erg \, s^{-1}} \dot{M}_{10^{-11} M_{\odot}/{\rm yr}}$$

熱エネルギー: 超新星爆発後の残熱

超新星残骸の中心の熱放射をする中性子星

表面からの熱放射

 $L_{\rm x} = 4\pi R^2 \sigma T^4$

$$L_{\rm x} = 1.5 \times 10^{35} \,\rm erg \, s^{-1} T_{0.3 \,\rm keV}^4$$

磁場エネルギー: 磁場が強い種族

マグネター(SGR,AXP)と呼ばれる新種族

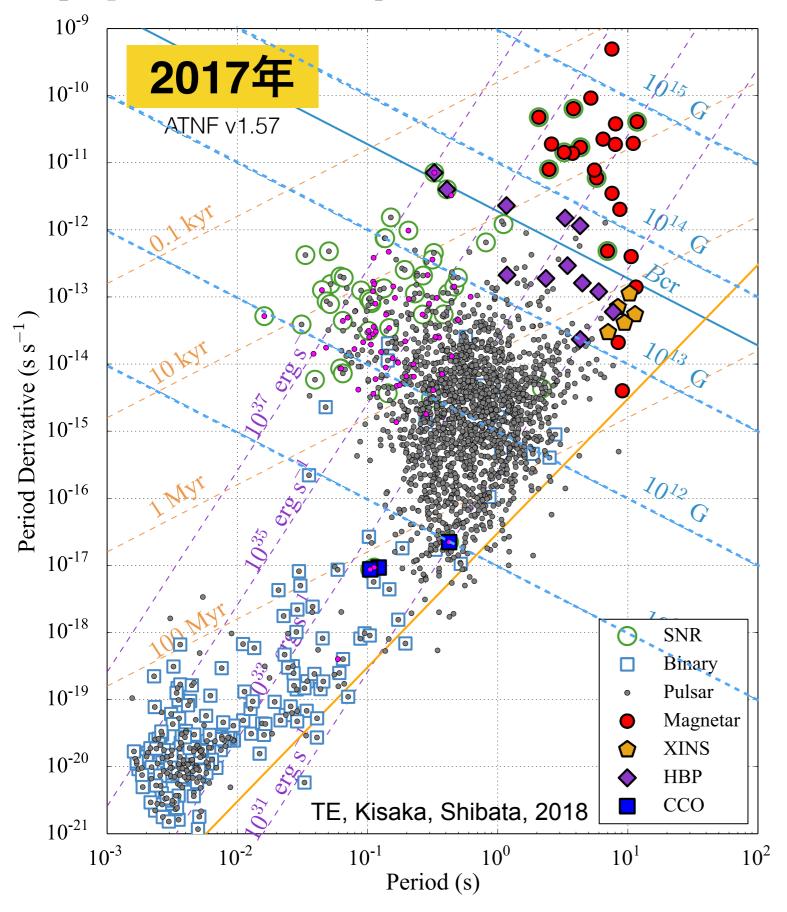
磁場散逸 (内部/磁気圏)

 $L_{\rm x} = (B^2/8\pi)(4\pi/3{\rm R}^3)/{\rm t}$

$$L_{\rm x} = 0.92 \times 10^{35} \,\rm erg \, s^{-1} B_{10^{15} \,\rm G}^2 t_{100 \,\rm kyr}^{-1}$$

L_x=10³⁵ erg/s, 10 kpc → F_x=10⁻¹¹ erg/s/cm² で精密観測へ

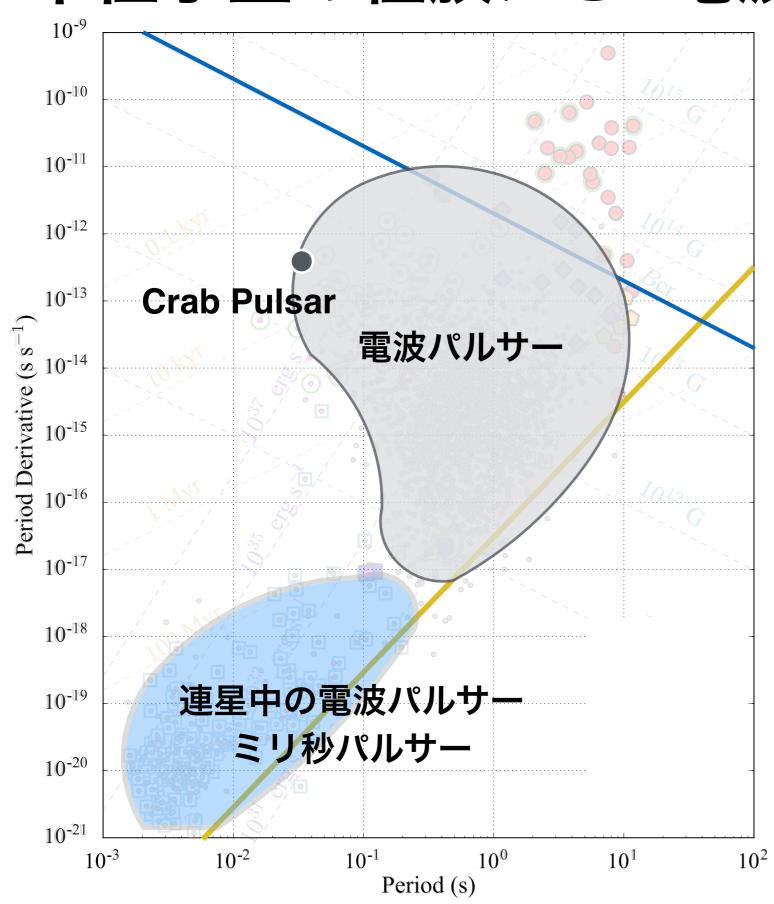
中性子星の種族たち



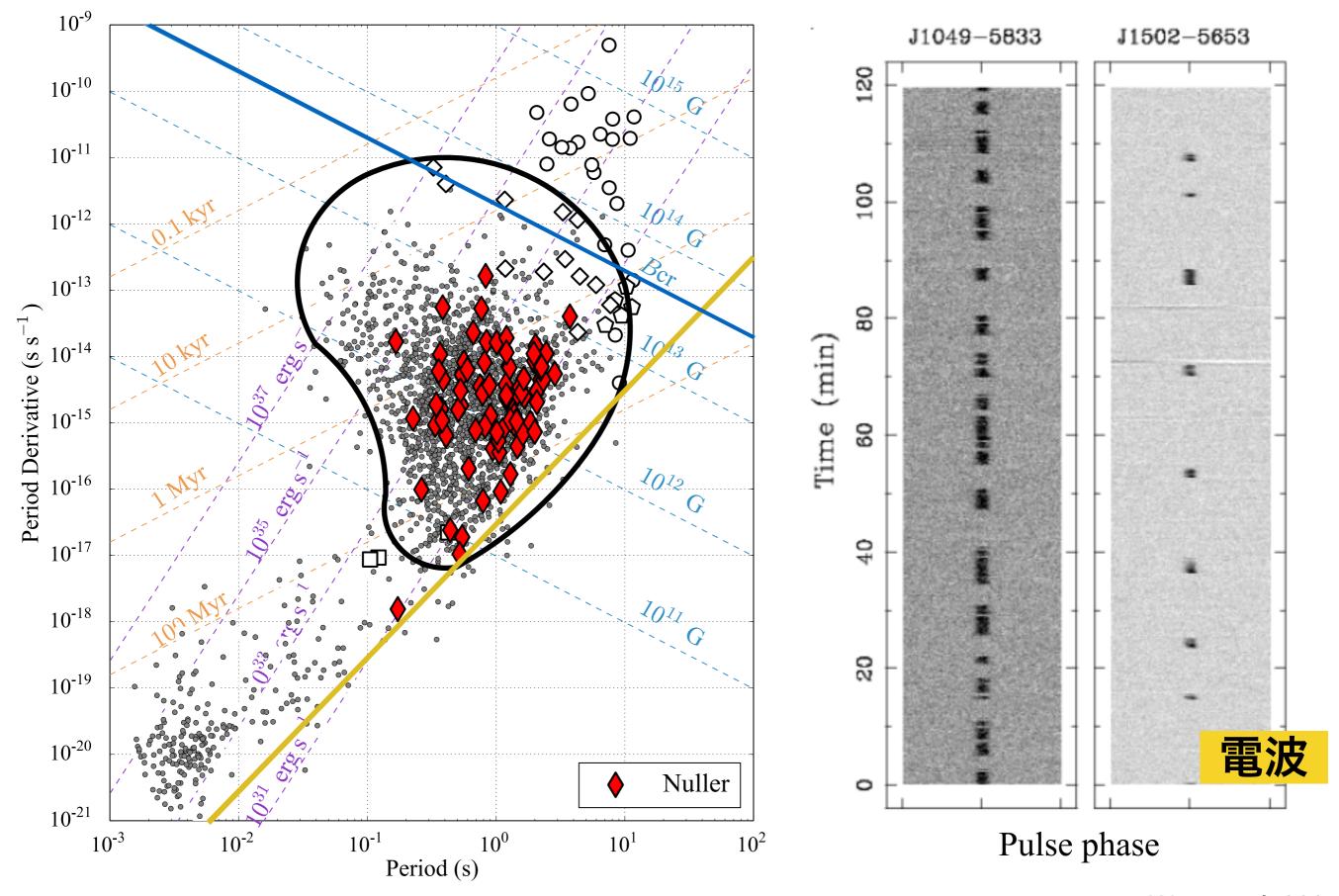


2500 (銀河系には 10 可視光 ~20 X線 ~100 ガンマ線 ~200

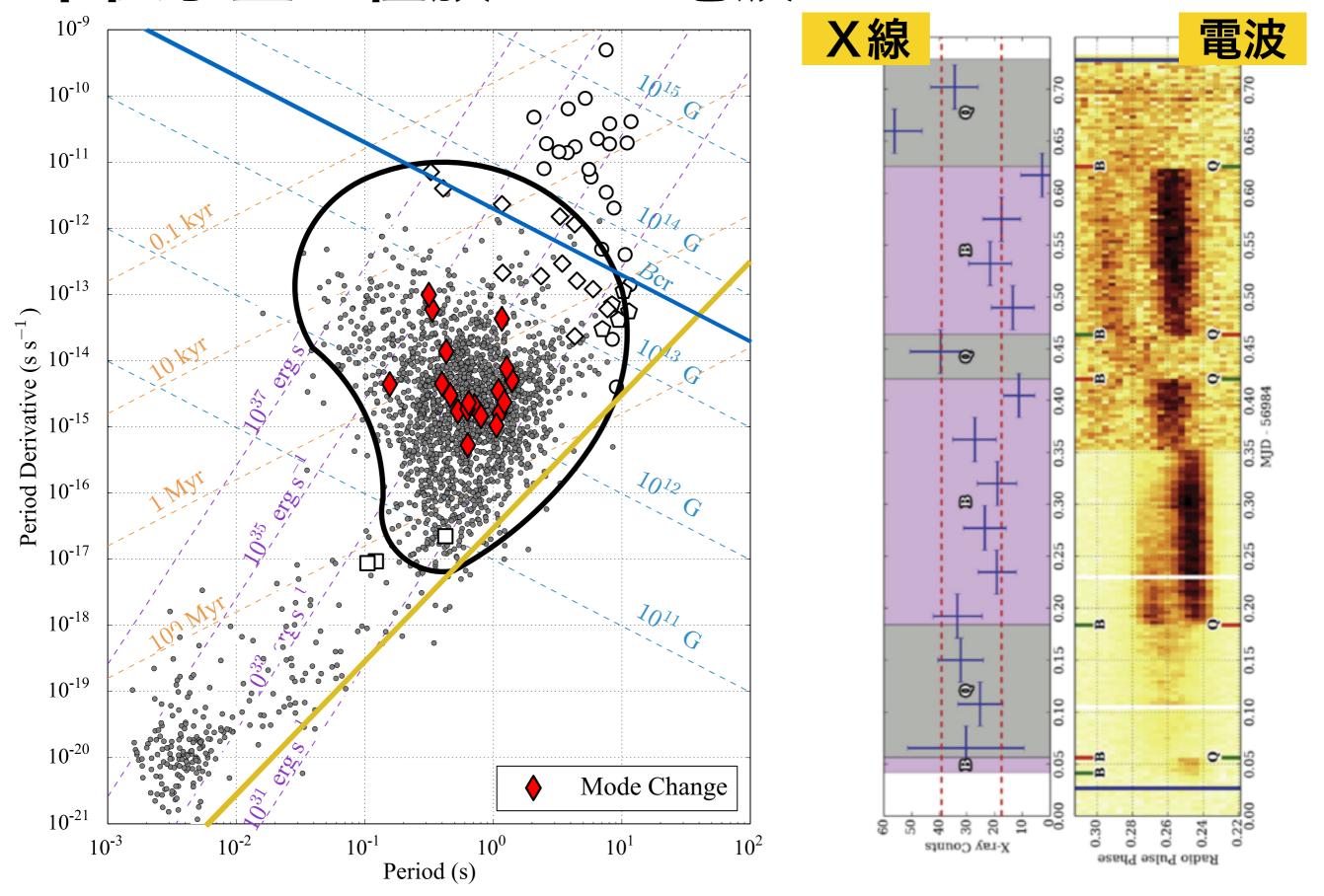
中性子星の種族たち:電波パルサー



中性子星の種族たち: 電波パルサー

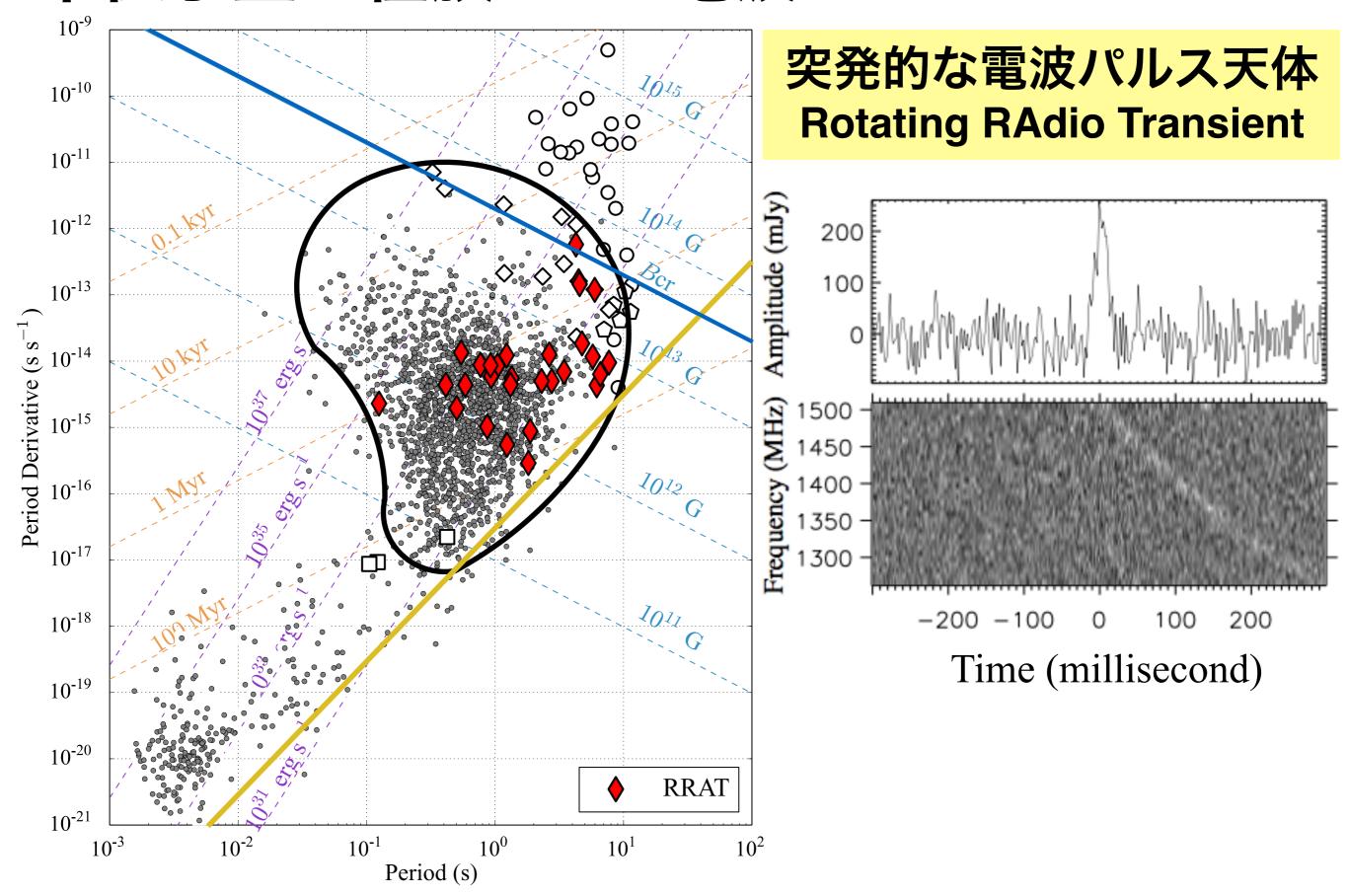


中性子星の種族たち:電波パルサー

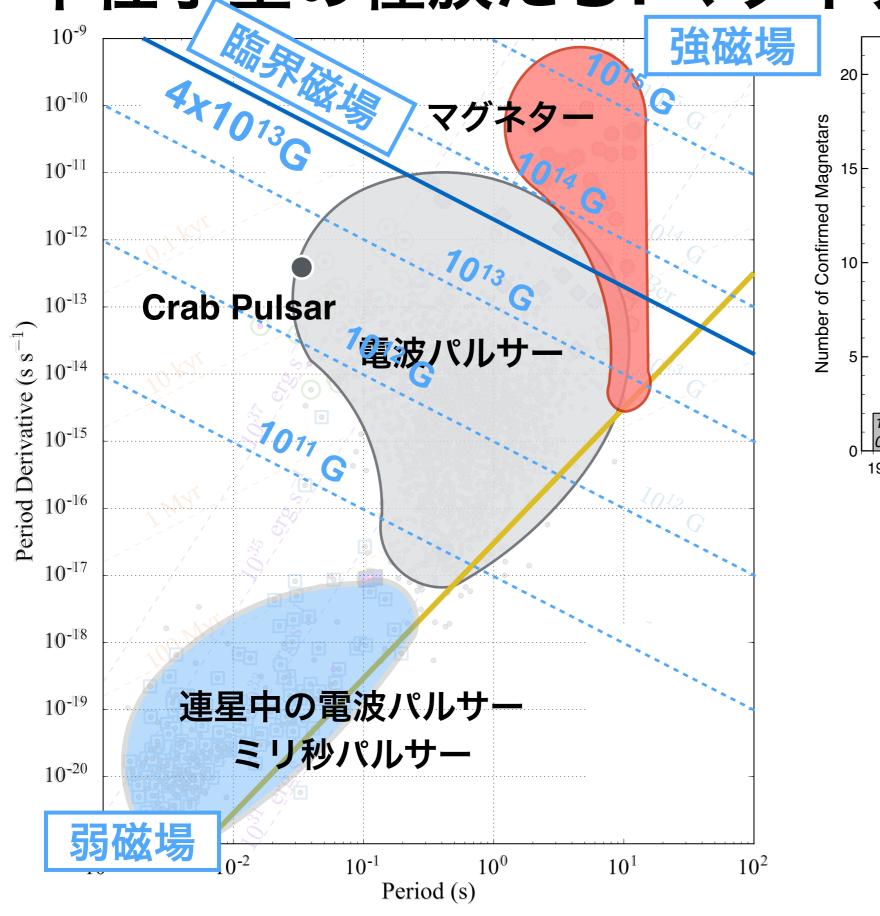


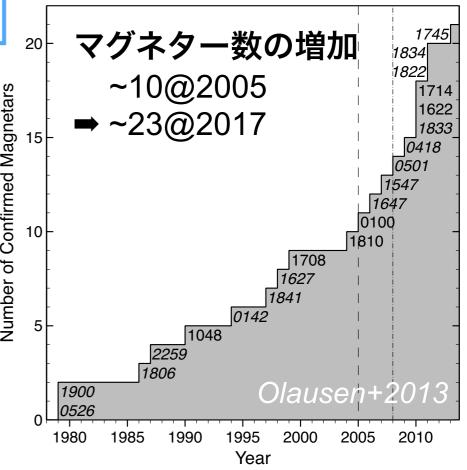
Mereghetti et al. 2016

中性子星の種族たち:電波パルサー



中性子星の種族たち: マグネター



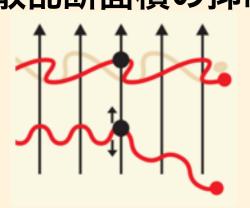


マグネター仮説

- 1. SNR に付随, 遅い自転 P & Pdot 大 ⇒ 若く (τ<100 kyr) & 強磁場B~10¹⁴⁻¹⁵ G
- 2. X線光度 $L_x >> スピンダウン光度 <math>L_{sd} \rightarrow 回転駆動型パルサーではない$
- 3. 連星の兆候なし ⇒ 降着駆動型パルサーでない
- 4. エディントン光度を超えるフレア現象 ⇒ B > 10¹⁴ G で散乱断面積の抑制?
- 5. 陽子サイクロトロン共鳴の兆候 ⇒ B > 10¹⁴ G を示唆
- 6. バースト活動 ⇒ 磁気エネルギーの散逸 (e.g., 磁気リコネクション)??

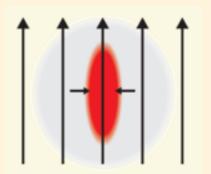
QED 臨界磁場

散乱断面積の抑制

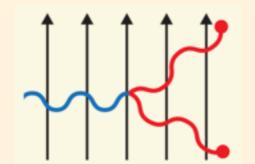


$$\hbar rac{eB}{m_e c} = m_e c^2 \Rightarrow extbf{\textit{B}}_{ extsf{QED}} = extbf{4.4 x } extbf{10}^{13} extbf{G}$$

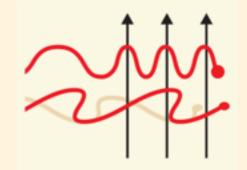
原子の変形



光子の自然分裂



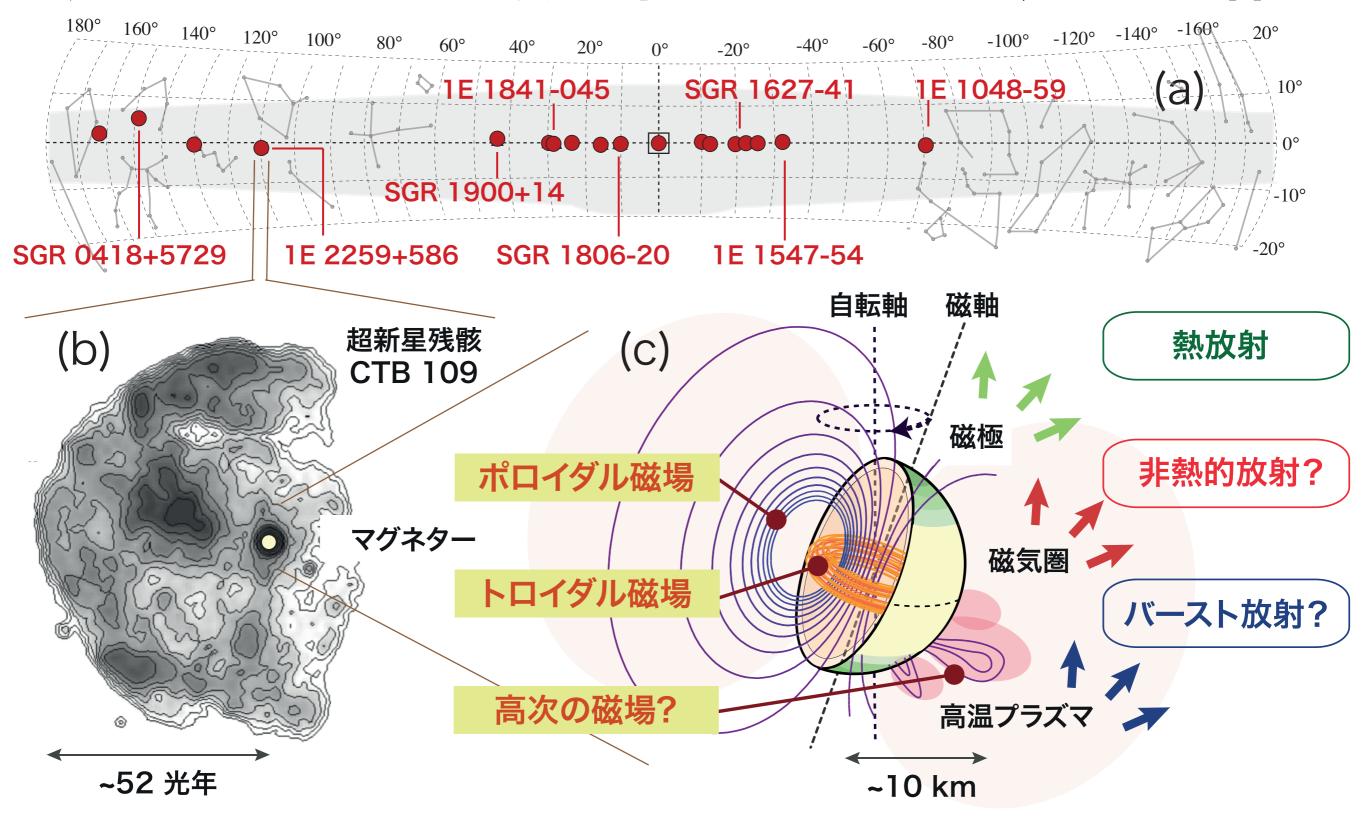
真空の複屈折



銀河系内で発見されてきたマグネターの観測的性質の共通理解は確立

(ただし、通常のダイポール磁場の中性子星や白色矮星の対立仮説はまだある)

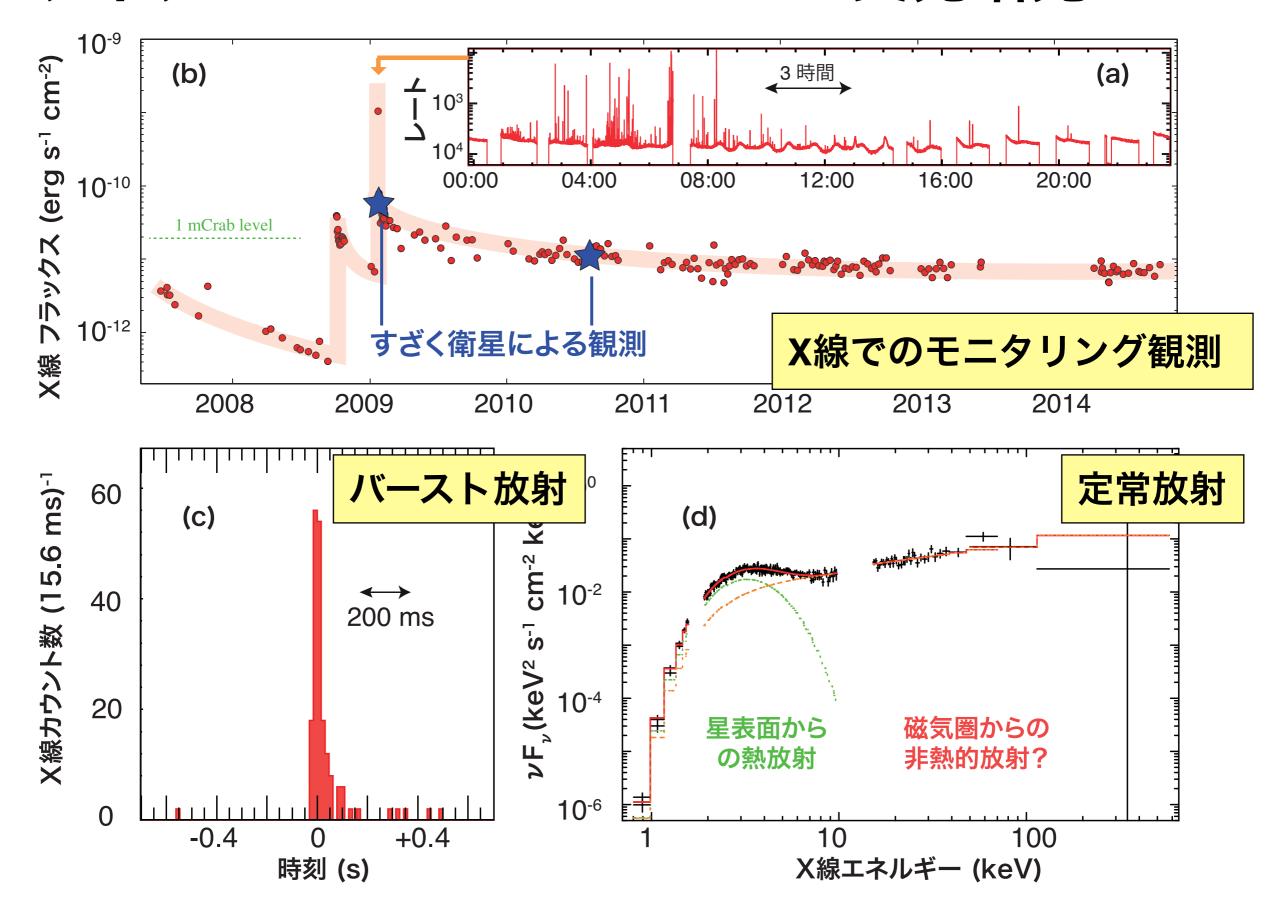
既知マグネター:銀河系・マゼラン雲に23天体



磁気エネルギーが、表面の熱放射、磁気圏の放射、バースト放射になる

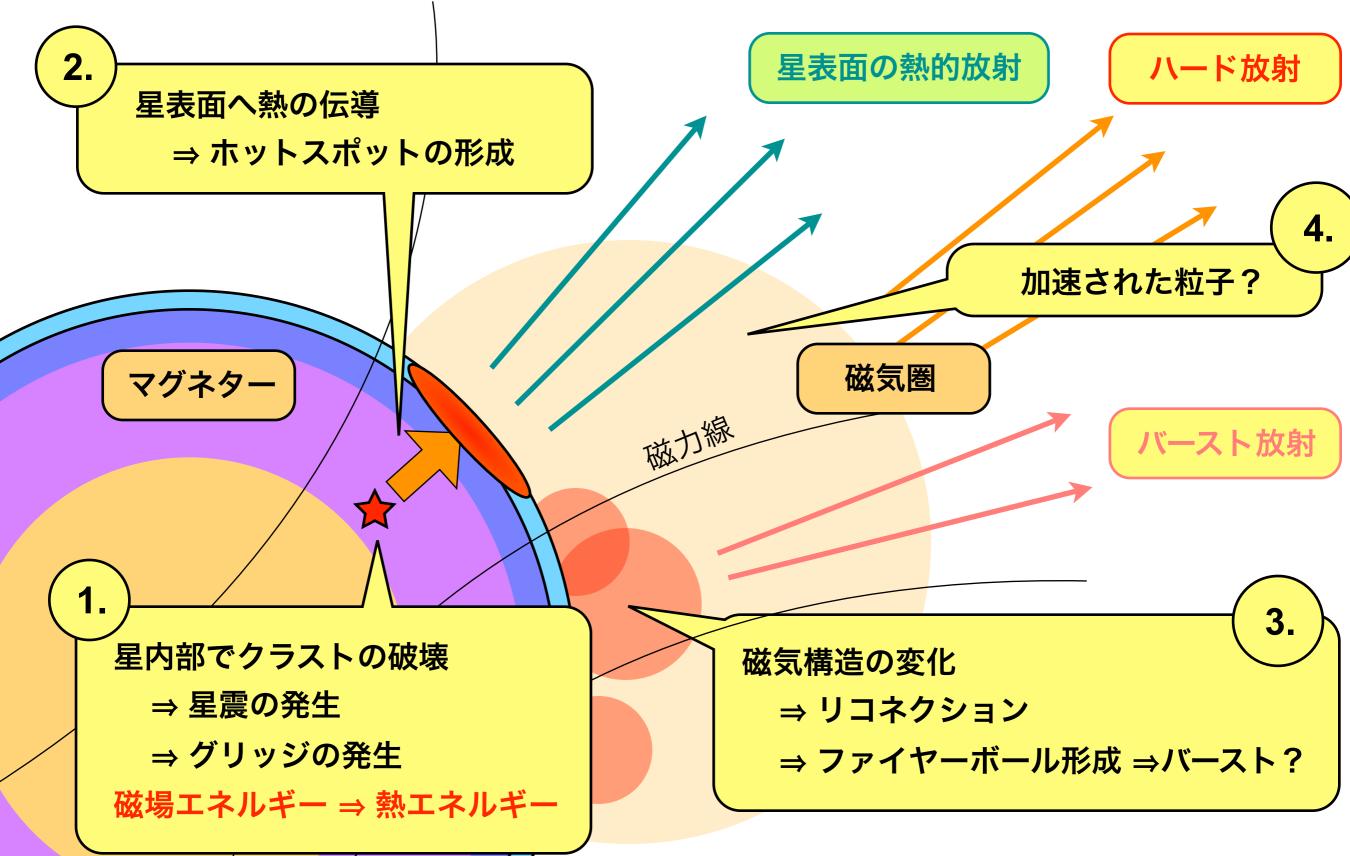
【解説記事】榎戸「宇宙最強の磁石星: マグネター観測で垣間見る極限物理」パリティ2015年8月号

マグネター 1E 1547.0-5408 での突発増光

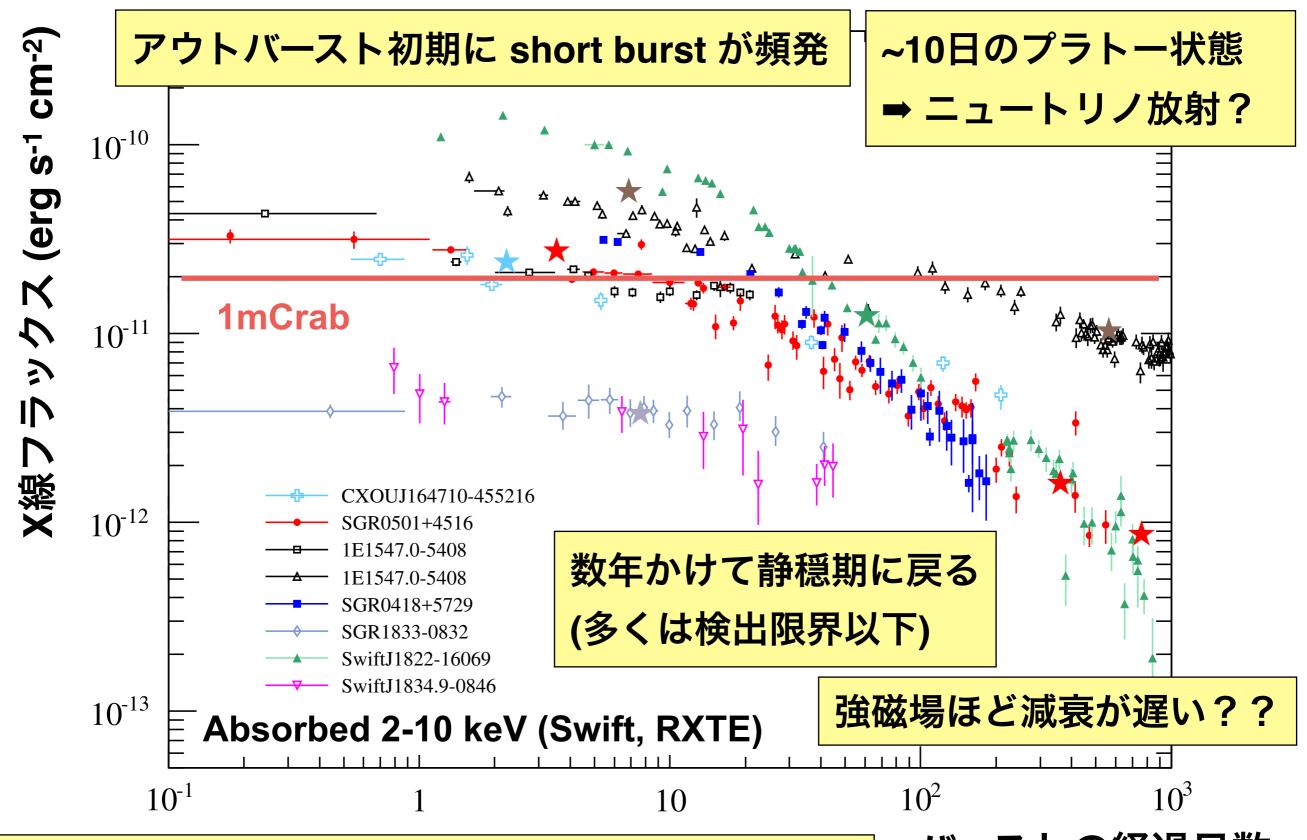


【解説記事】榎戸「宇宙最強の磁石星: マグネター観測で垣間見る極限物理」パリティ2015年8月号

マグネター突発増光での磁気エネルギー解放



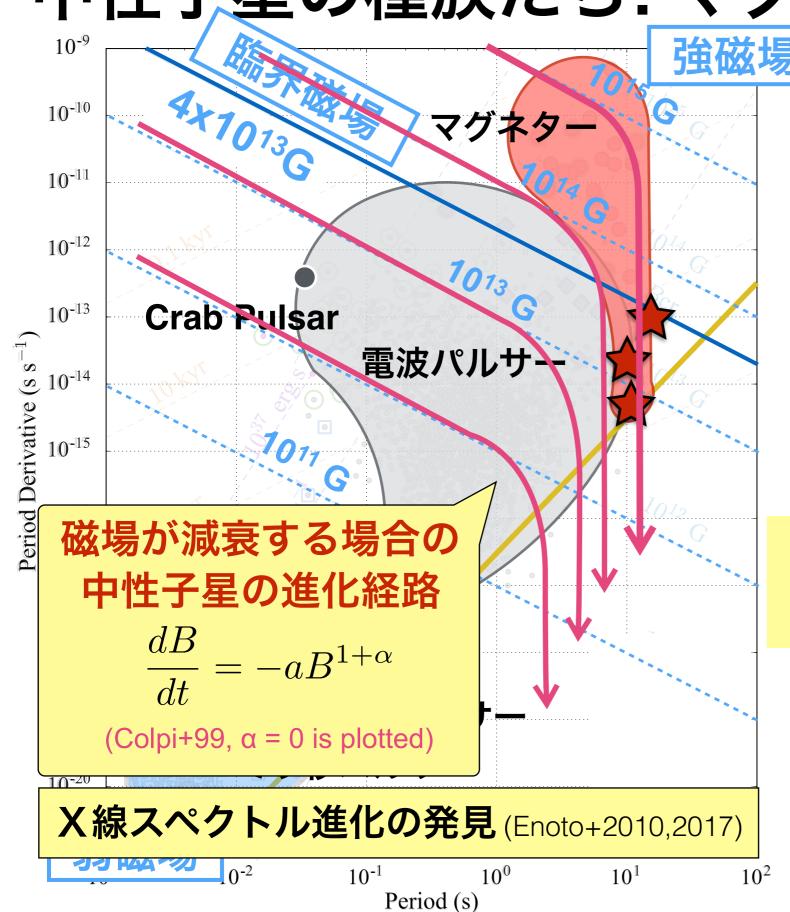
マグネターのX線アウトバースト主に星表面の放射が観測

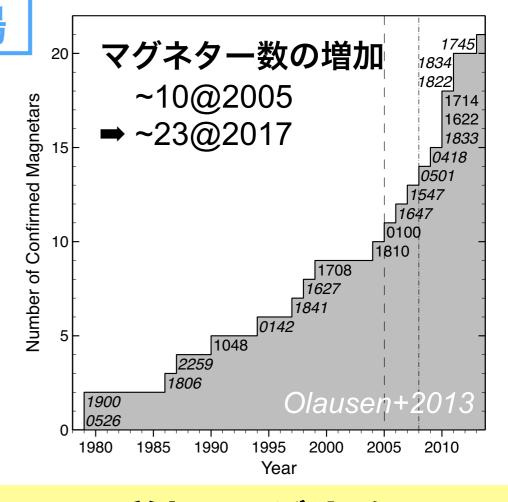


星内部 or 磁気圏の磁場エネルギー解放後の冷却過程

バーストの経過日数 (Enoto et al., ApJS 2017)

中性子星の種族たち: マグネター

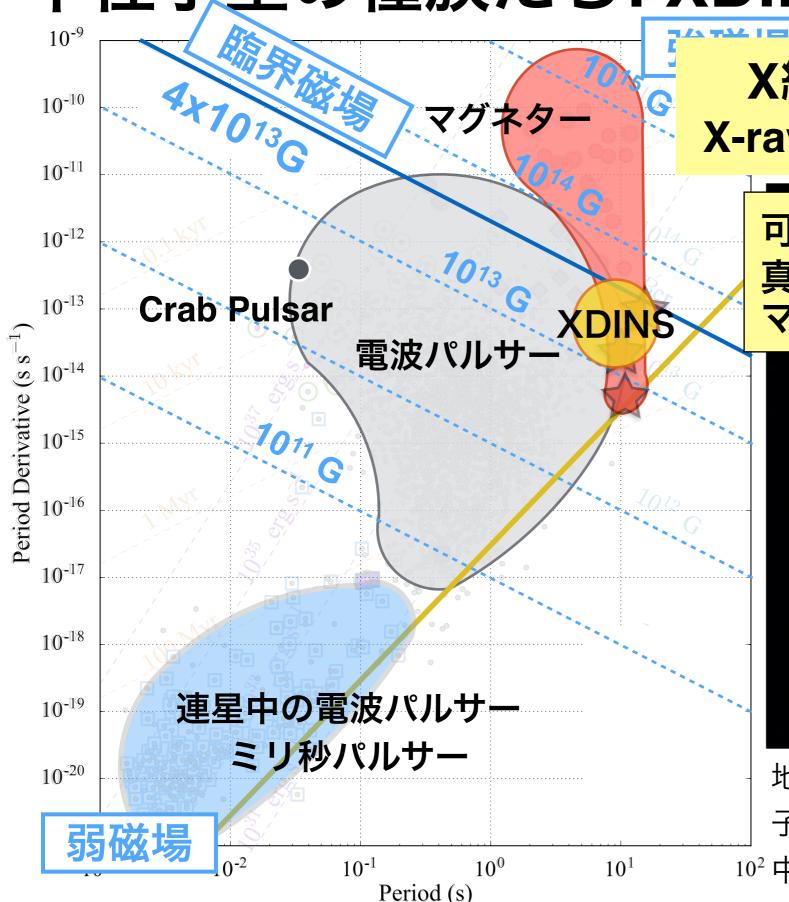




弱磁場マグネター Low field magnetar

P-Pdot か求めた表面磁場は臨界磁場を下回るが、マグネター特有のアウトバーストなどの磁気活動を示す。

SGR 0418+5729、Swift J1822.3-1606 など3天体が知られる。 中性子星の種族たち: XDINS



X線で輝く孤立中性子星 X-ray Dim Isolated NS (XDINS)

可視偏光の検出 (PD=16.4±5.3%) 真空偏極の証拠? Mignani+2016, MNRAS マグネターの末裔なのか?

地球に最も近い孤立中性子星 RX J1856.5-3754

Image credit: Chandra X-ray Observatory

地球近傍にある電波放射のない孤立中性 子星。数秒の自転周期と熱的なX線放射。

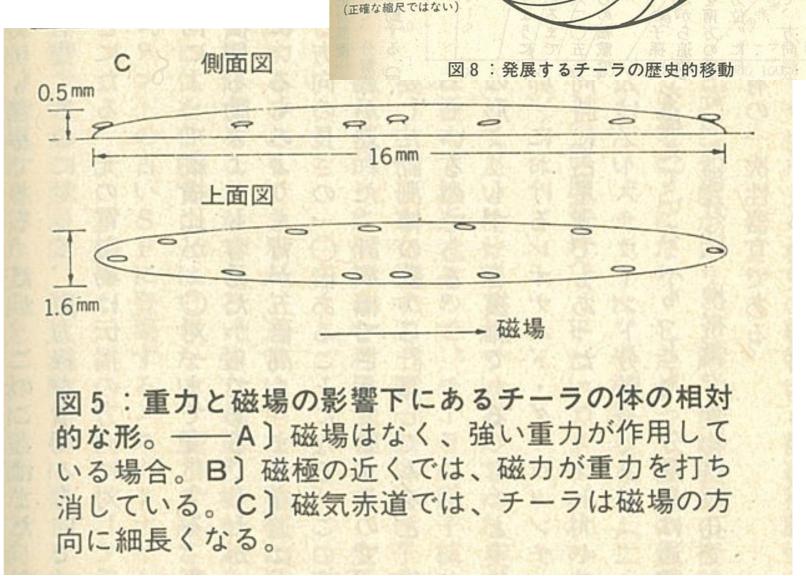
10² 中性子星の残熱 (+磁場) で輝く? アウトバーストは観測されていない。 小説「竜の卵 (Dragon's Egg)」

R. L. Forward

年に

査船が中性子星の上の生物を発見する話。著者 フォワードの指導教官は、初期の重力波実験に 多大な影響を与えた





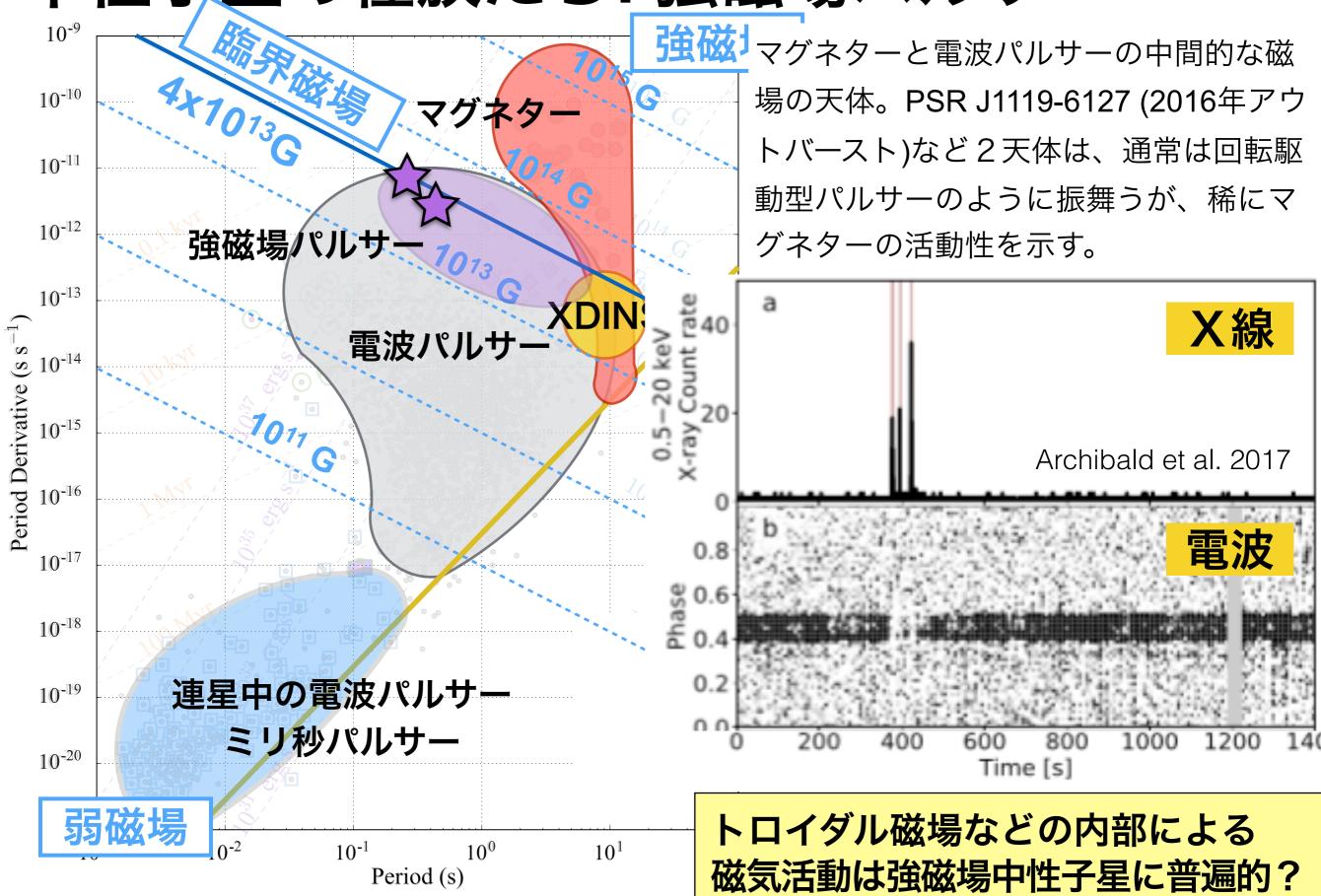
クラックによる 数学の発見

ブライトの楽園

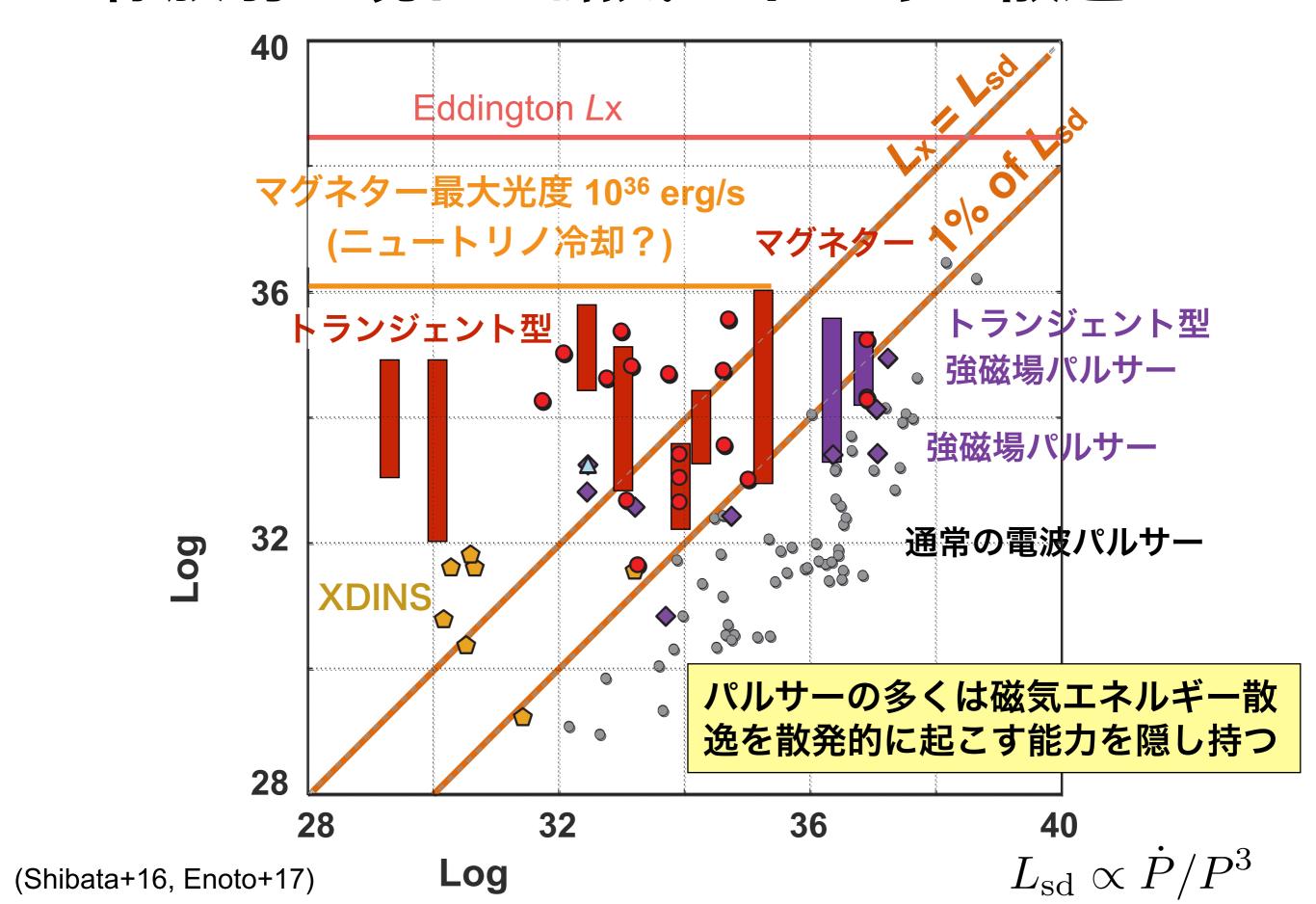
ピンク=アイの伝道

XDINSs は 100-300 pc と近いが、Dragon's Egg を彷彿とさせる。 X線放射の弱いマグネターの末裔がまだ近傍に隠れている可能性は?

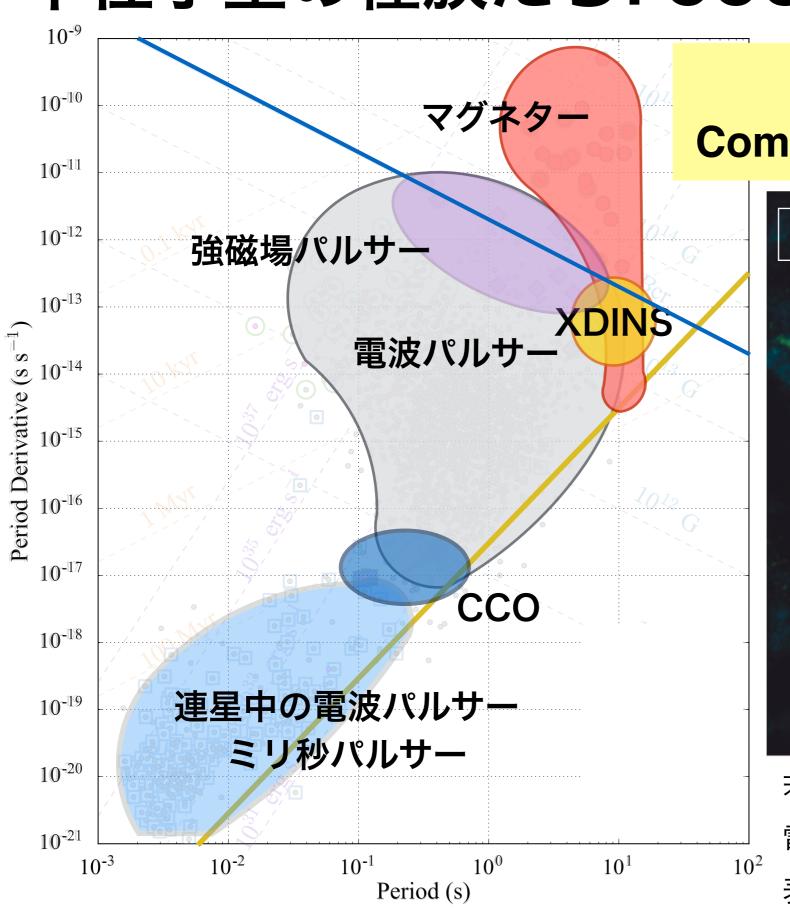
中性子星の種族たち: 強磁場パルサー



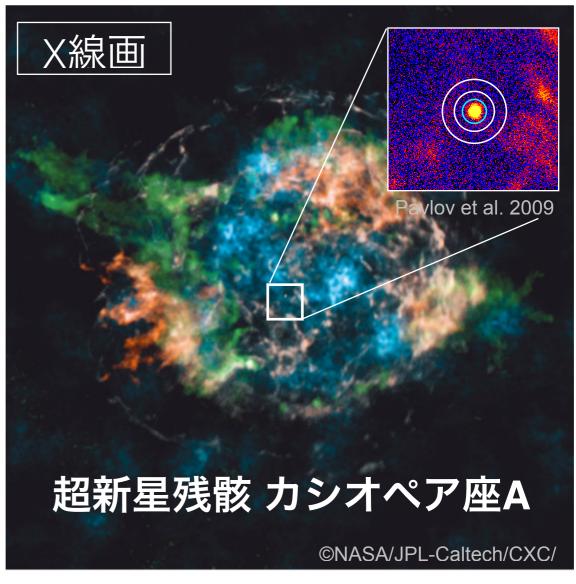
X線放射に現れる磁気エネルギー散逸



中性子星の種族たち: CCO

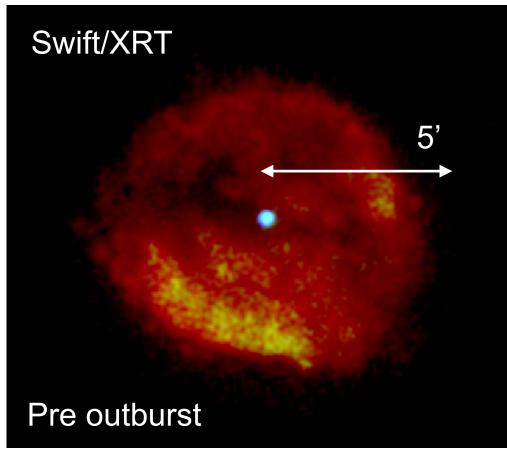


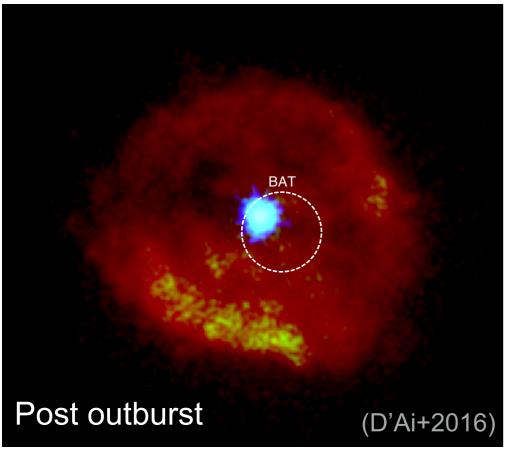
SNR中心の軟X線源 Compact Central Object (CCO)



若い超新星残骸の中心の軟X線源で、 電波は出さずX線パルスも弱い。 表面からの熱放射と考えられるが...

CCO からもマグネター放射が検出された





Compact Central Object (CCO)

超新星残骸の中心にあるX線源で、一般的にはマグネターと異なり回転が速く(P~0.1-0.4~s)、減速が小さい $(P_{dot}<~10^{-14}~s/s)$ ので表面磁場は小さくなる $(B~10^{-11}~G?)$ 。複数の種族が混在しているかも?

• 奇妙な天体 CCO 1E 161348-5055

超新星残骸 RCW 103 の中心天体で、6.67 hour という孤立中性子星の標準モデルの自転では説明 できない周期性を示す CCO の中でも特異天体。 超新星残骸のX線観測から典型的な重力崩壊型。

マグネター様アウトバーストの検出

2016年6月22日にマグネターのショートバーストに加え定常X線の増光が観測された。パルス波形は変化したが長周期は大きくは変化しなかった。

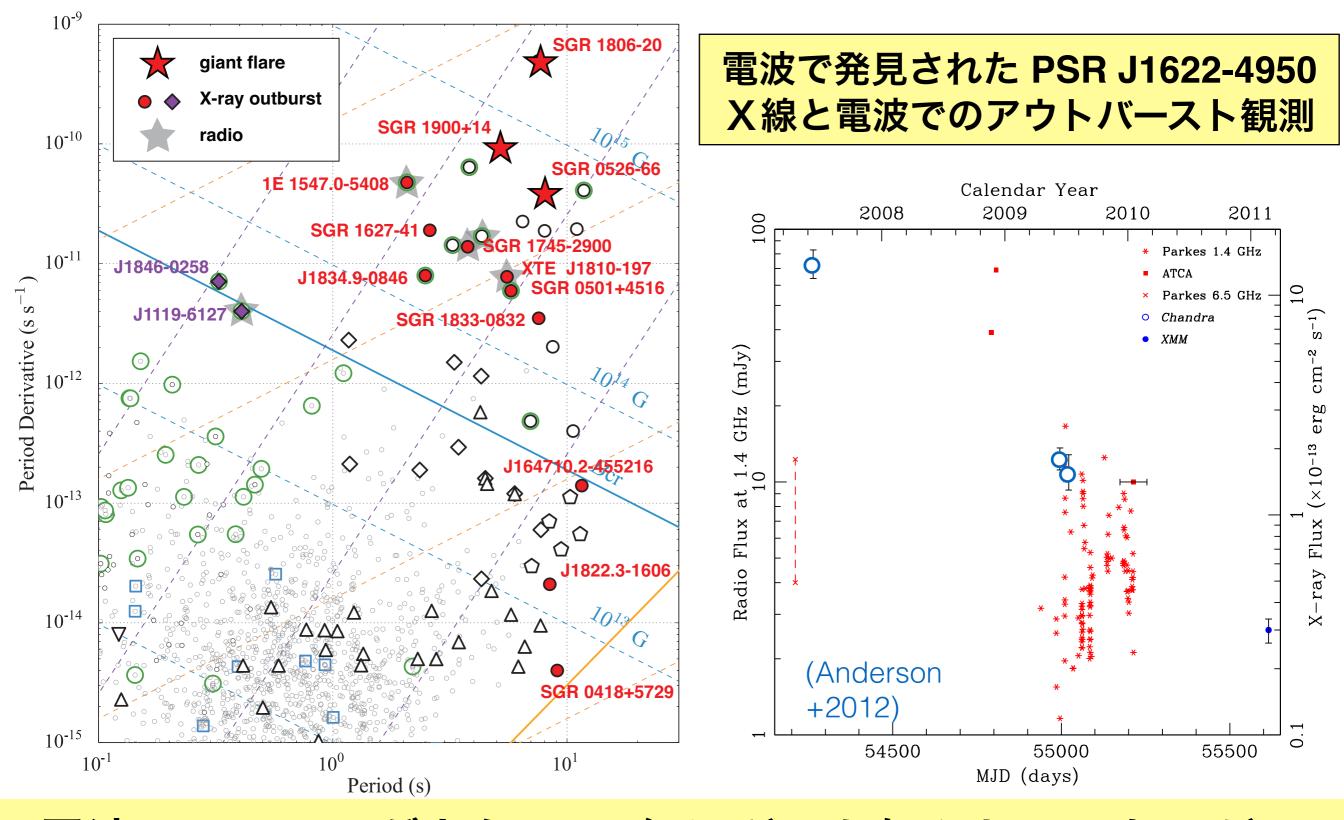
• 長周期とマグネター活動性の起源は?

fall-back disk により急速に減速がかかり、押し込められた磁場がマグネター活動を起こした?不明...

弱磁場のはずの中性子星でも マグネター的な磁気活動?

Luca+2006, Frank+2015 Rea+2016, D'Ai+2016

マグネターのX線と電波による同時観測



電波で明るいマグネターは5個ほどしか知られていないが、 今後、X線と電波の同時観測が盛んになると考えられる。

Neutron star Interior Composition ExploreR

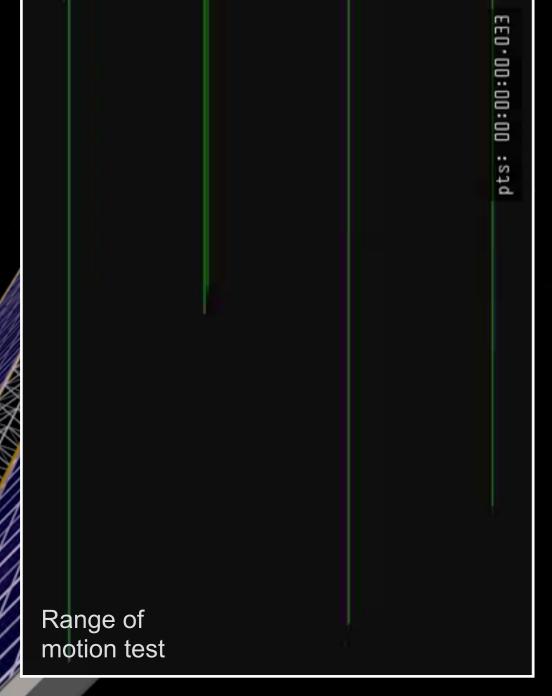


• Platform: ISS external attached payload with active pointing



Neutron star Interior Composition ExploreR

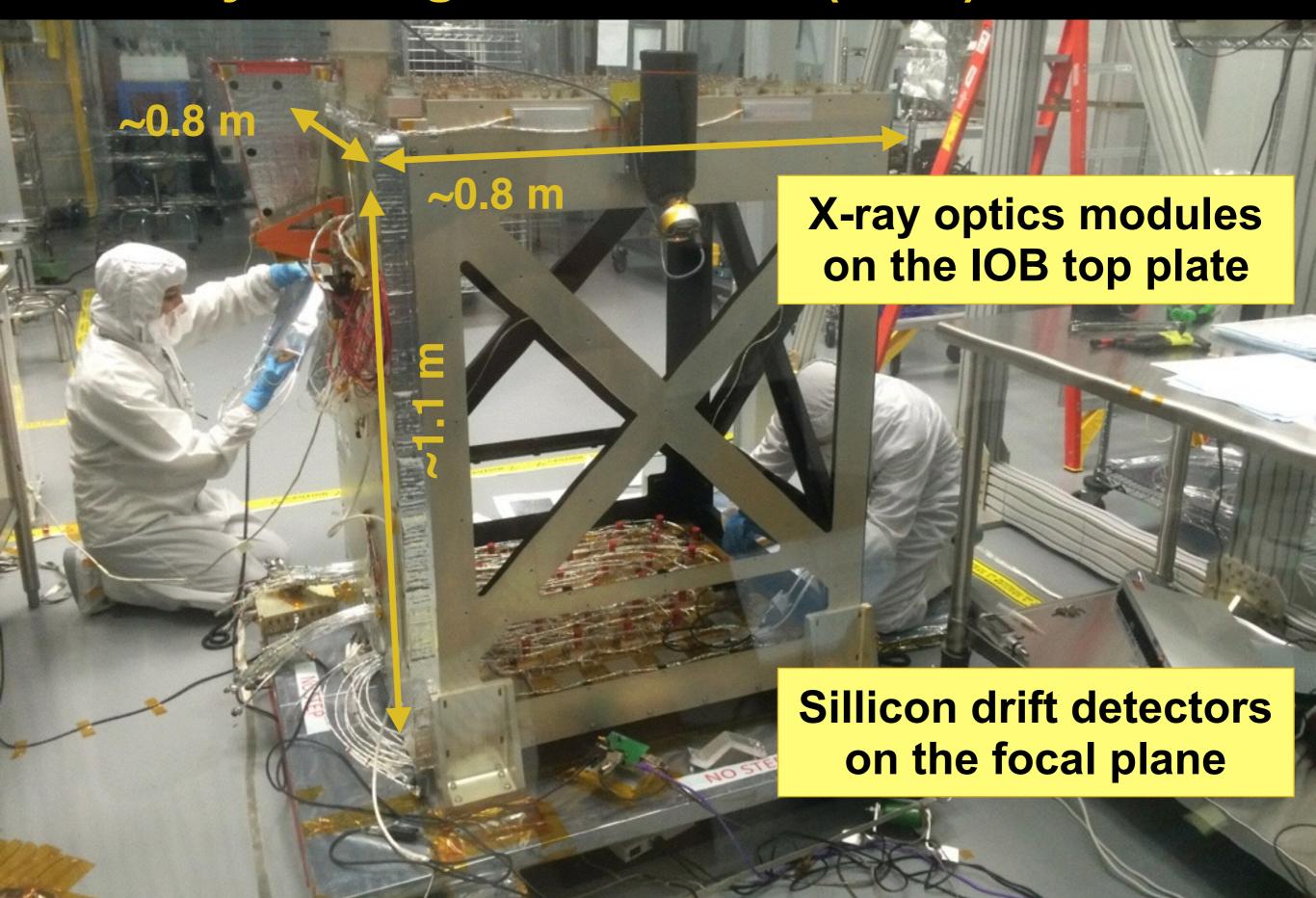
- **NICER** mission: Soft X-ray (0.2-12 keV) timing spectroscopy for neutron star structure, dynamics, and energetics.
- Platform: ISS external attached payload with active pointing
 - Launched June 3, 2017; Installed on ISS, June 13
- Duration: 18 months science mission + GO extension





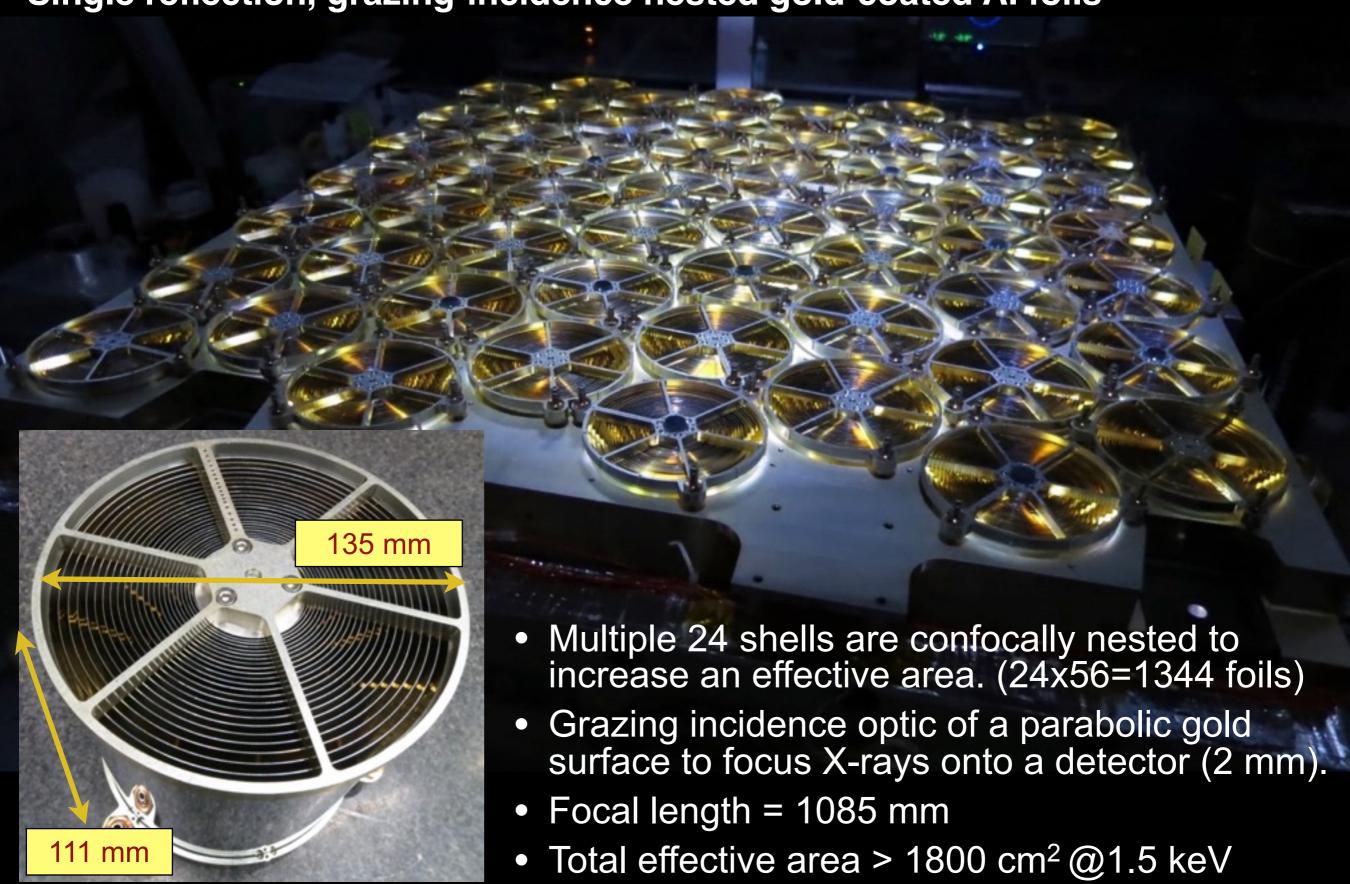


56 X-ray Timing Instruments (XTIs) of NICER



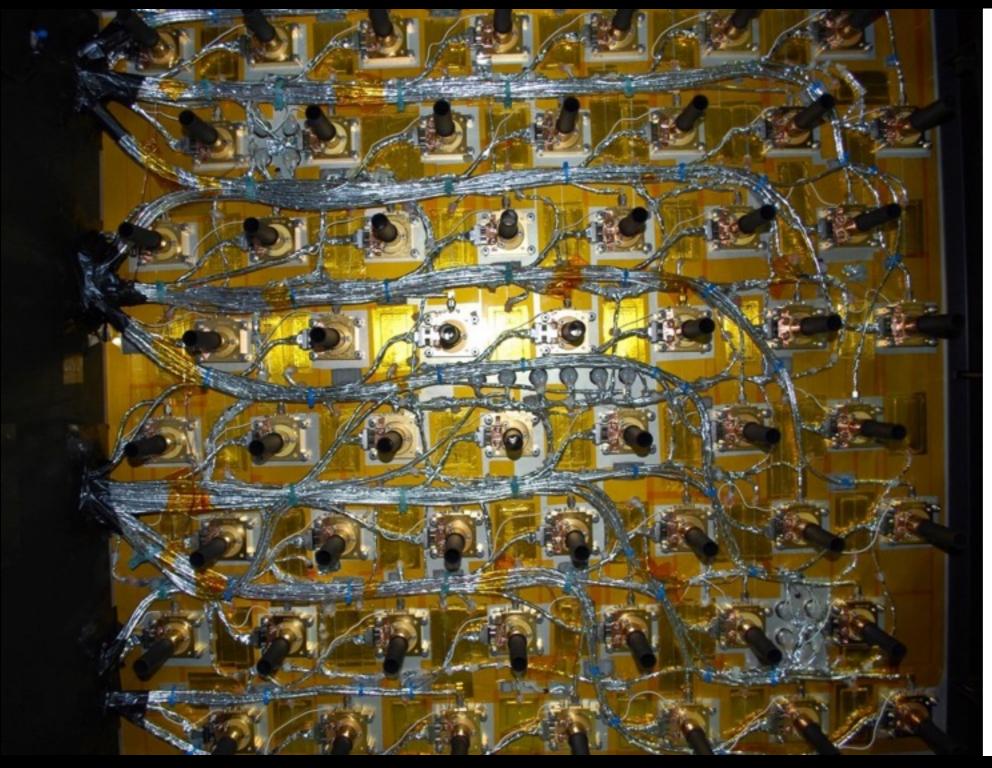
X-Ray Concentrator optics (XRC)

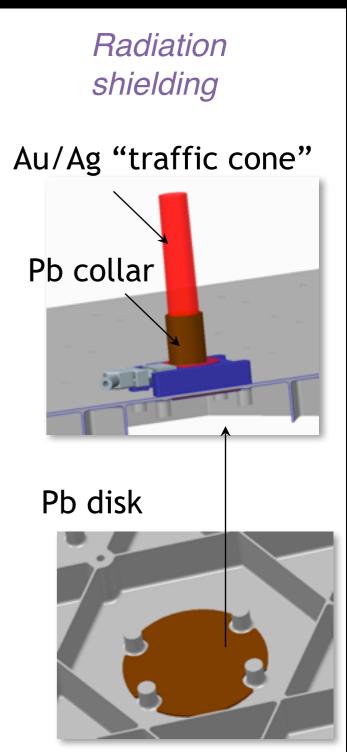
Single reflection, grazing-incidence nested gold-coated Al foils



Sillicon Drift Detectors (SDDs)

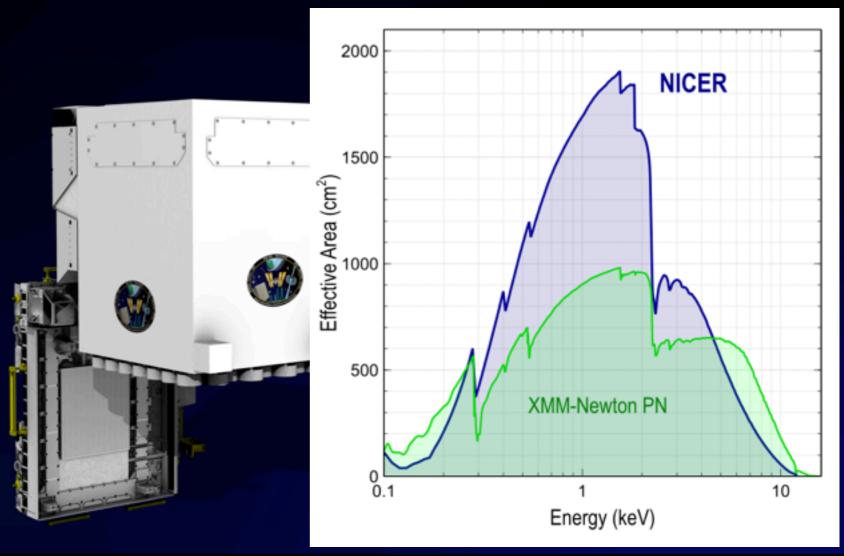
Resolution: 140 eV @ 6 keV, Time resolution: <100 ns RMS (absolute)





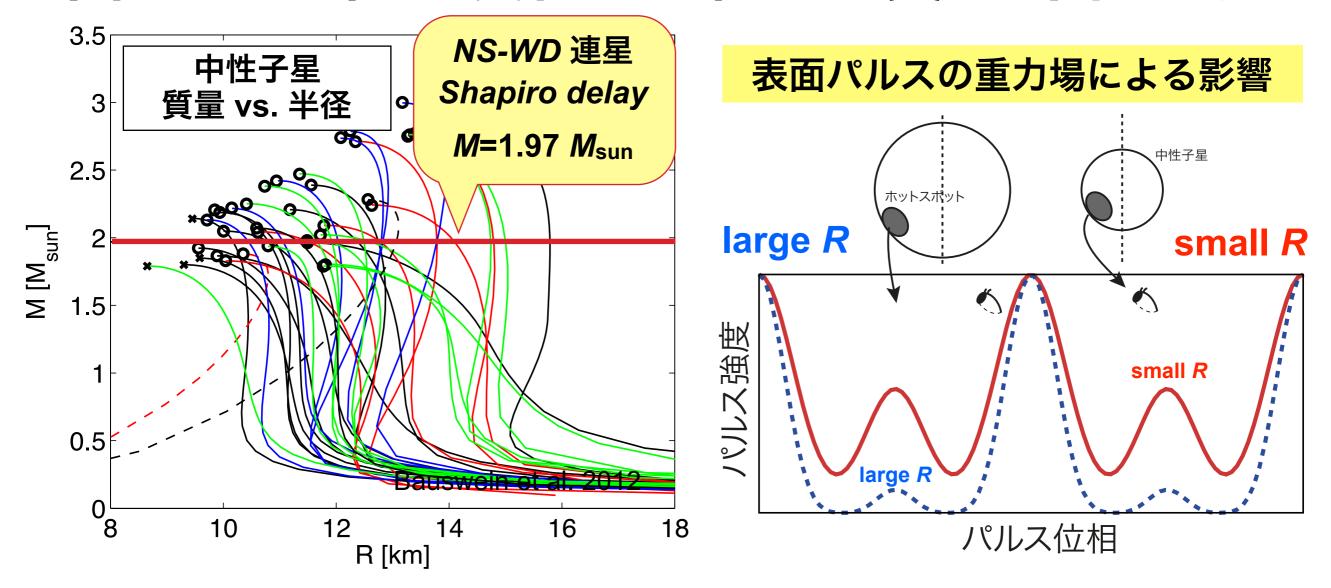
Neutron Star Interior Composition Explorer (c) NICER Team (PI: K. Gendreau, NASA/GSFC)

Large effective area High time resolution

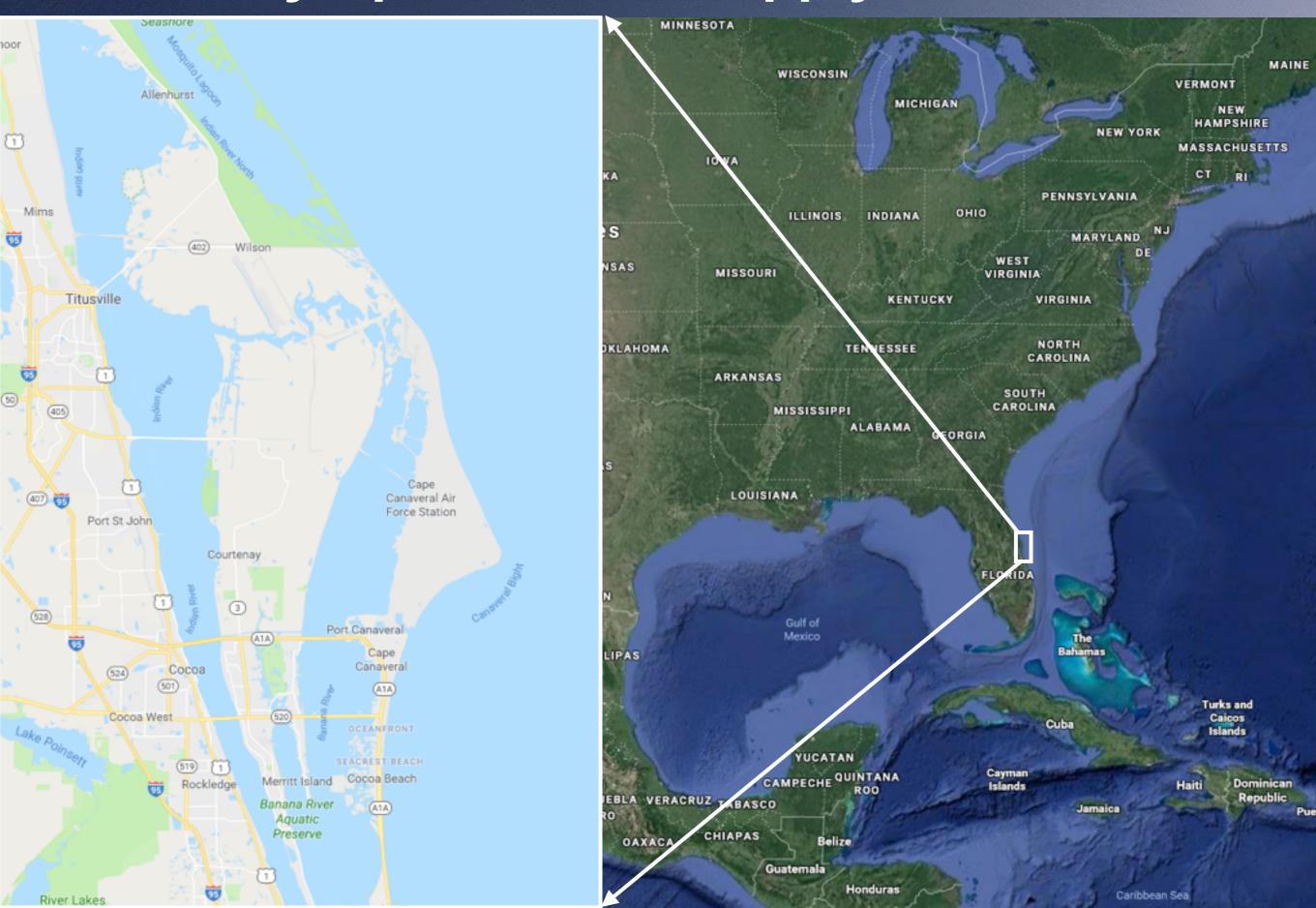


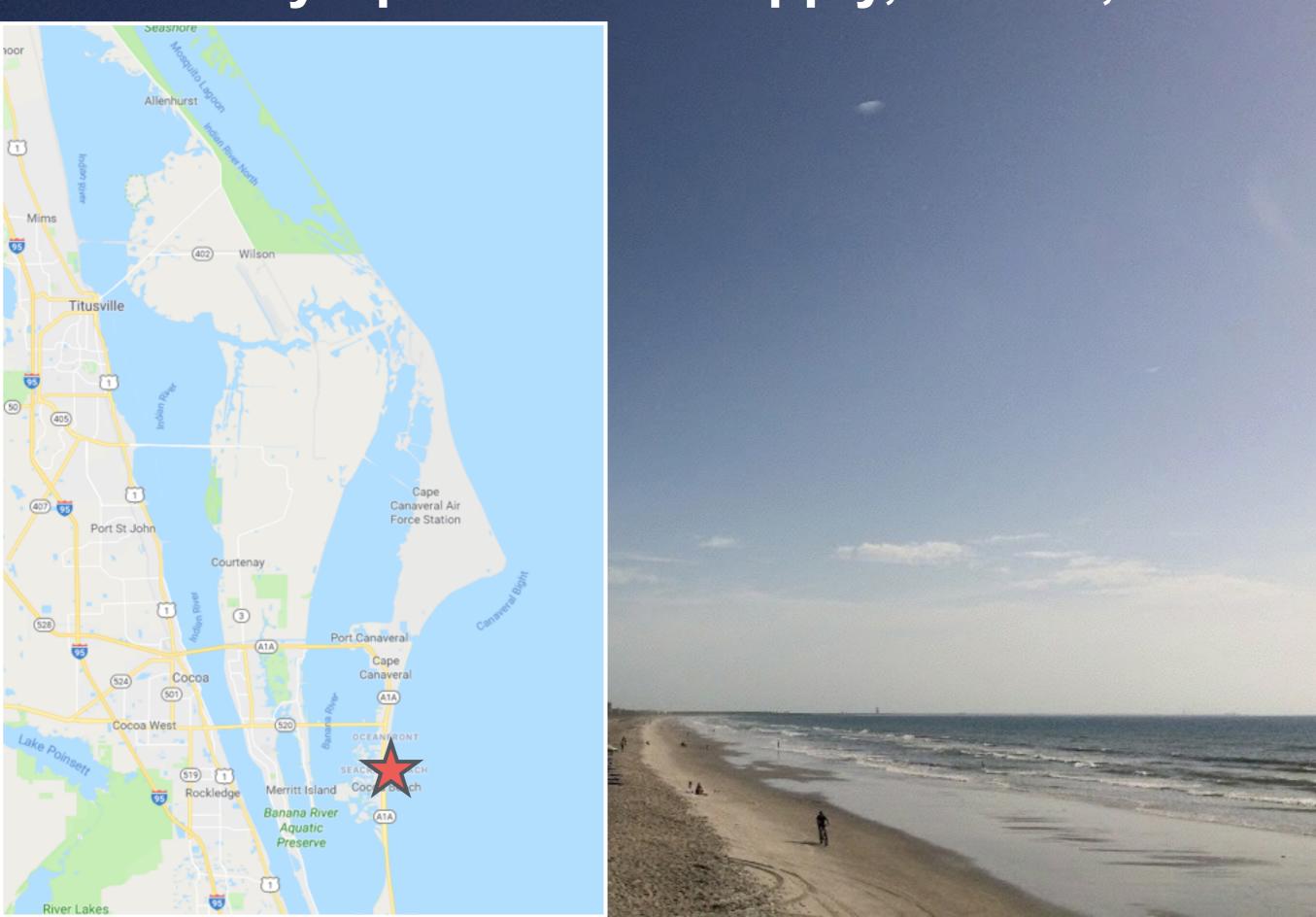
- Energy band: 0.2-12 keV (Resolution: 140 eV @ 6 keV)
- Time resolution : <100 ns RMS (absolute)
- Non-imaging FOV 6 arcmin diameter
- Background : < 0.5 cps
- Sensitivity: 1×10⁻¹³ erg/s/cm² (5σ, 0.5-10 keV, 10 ksec exposure for Crab-like)
- Max rate: ~38,000 cps (3.5 Crab)

中性子星の高密度状態方程式と質量-半径の測定

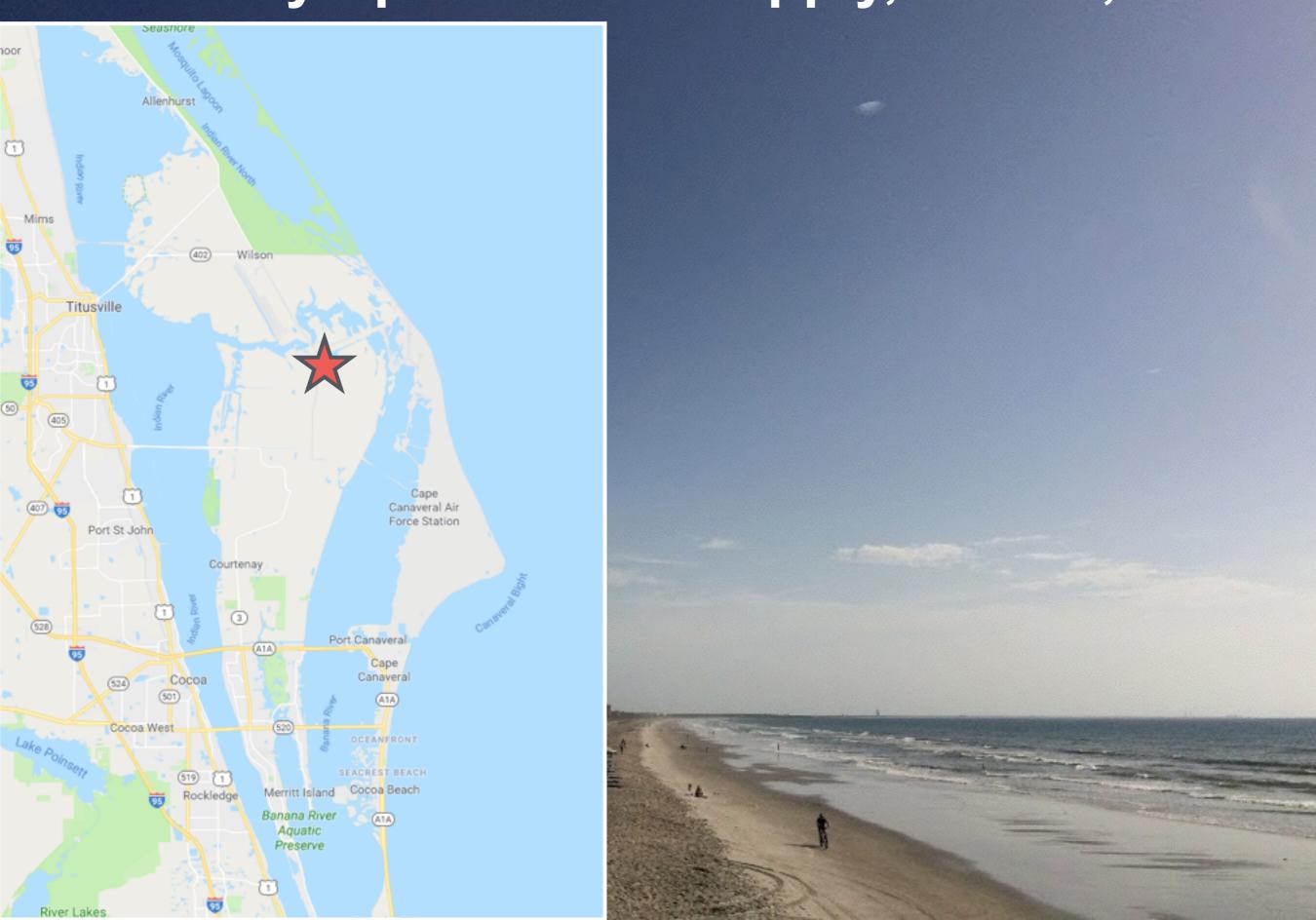


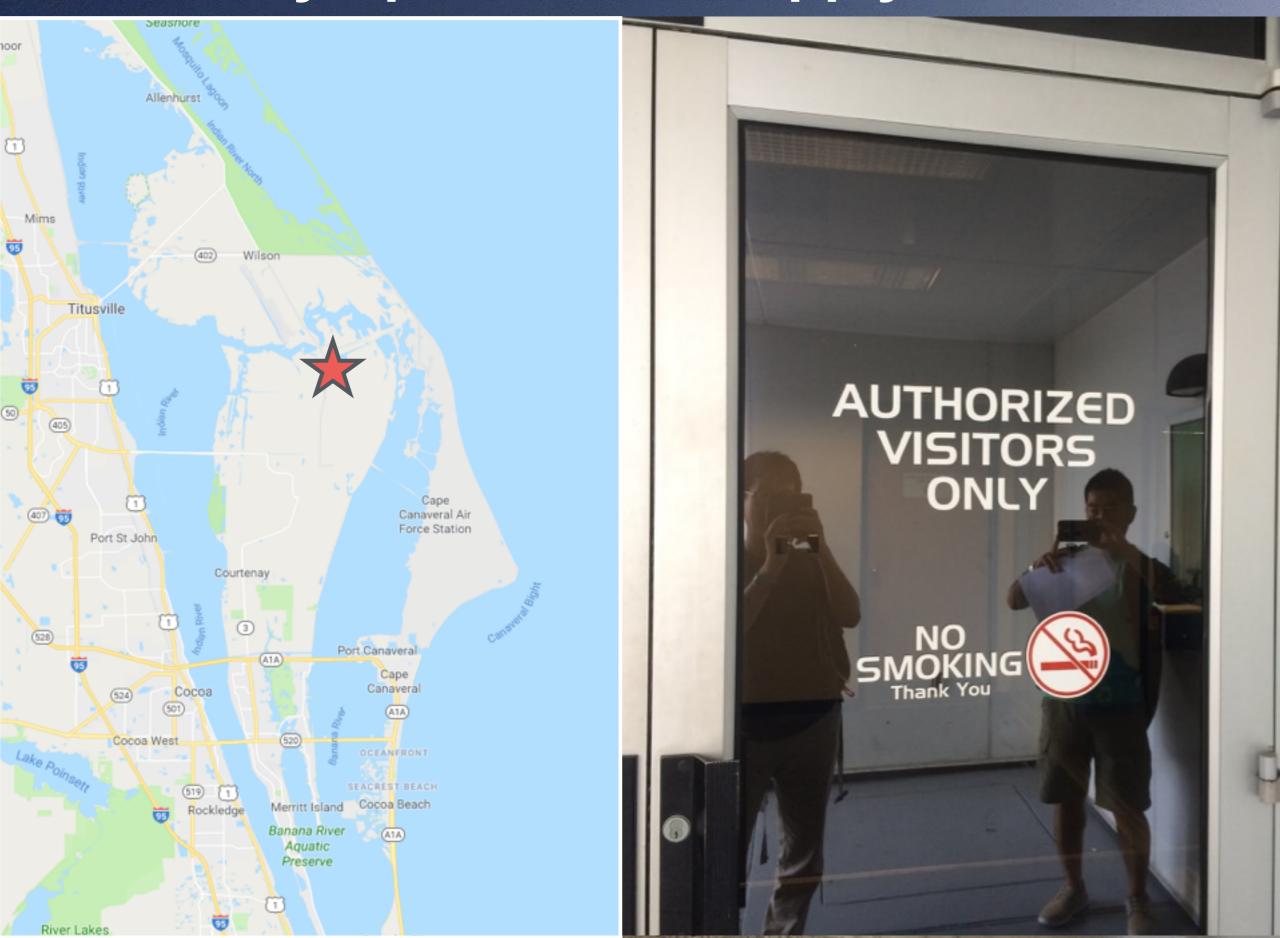
- ・原子核密度 $\rho=3\times10^{14}$ g/cm 3 を超える中性子星(NS)内部の状態方程式は未解明。
- ・状態方程式と質量-半径は一対一対応⇒理論モデルの切り分けには宇宙観測が必要。
- ・質量はパルサーの連星運動から精度のよい測定が可能 (例: 電波の Shapiro delay)。
- ・半径は表面のX線放射はきわめて難しい(天体距離、大気組成、磁場の影響)。
- ・M/R比 (コンパクトネス) 測定に期待。重力場の影響でパルス波形が歪む効果で測定。







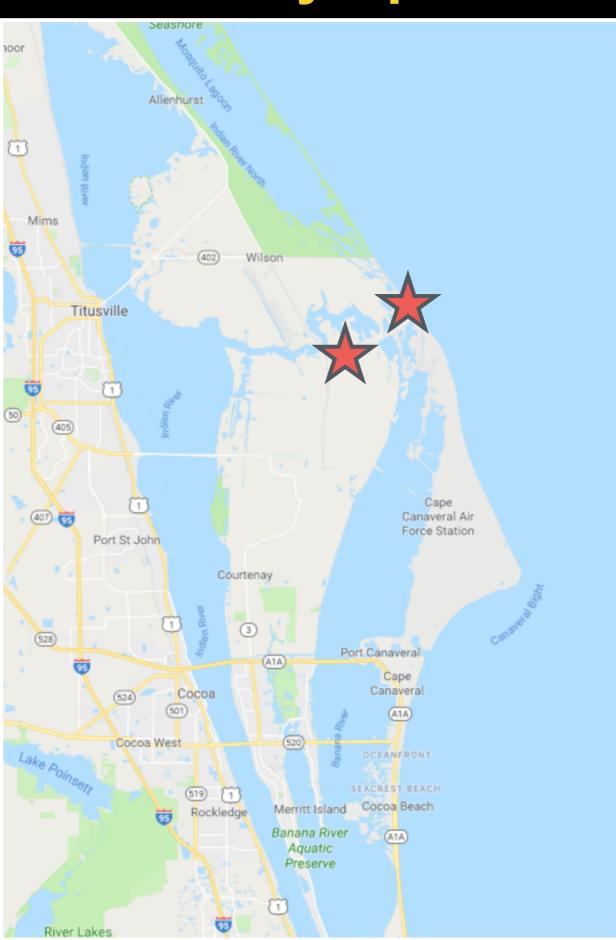






















Dragon proceed to ISS transfer orbit



Extraction from Dragon was delicate



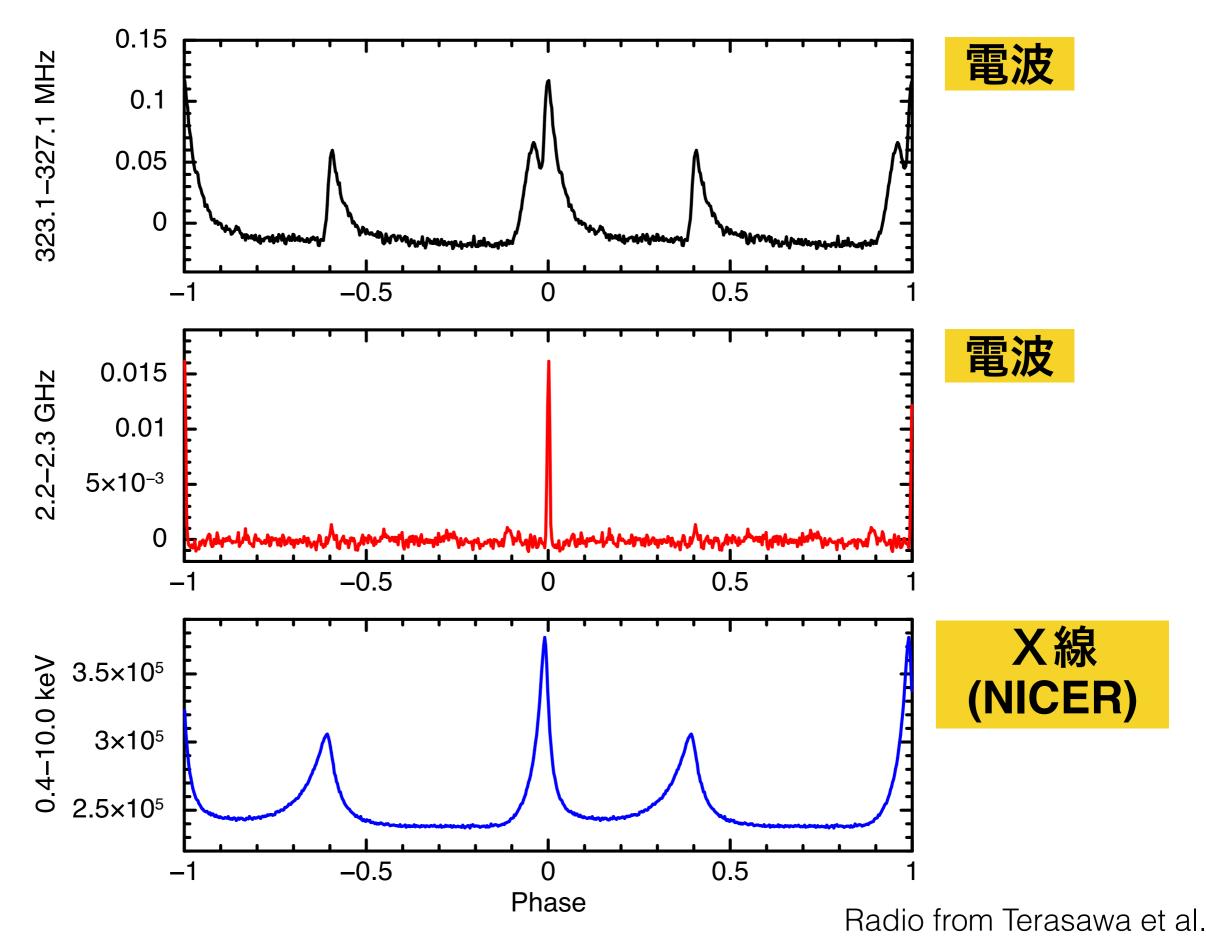
Installation and Development on ISS

NICER Initial Observation: Crab Pulsar

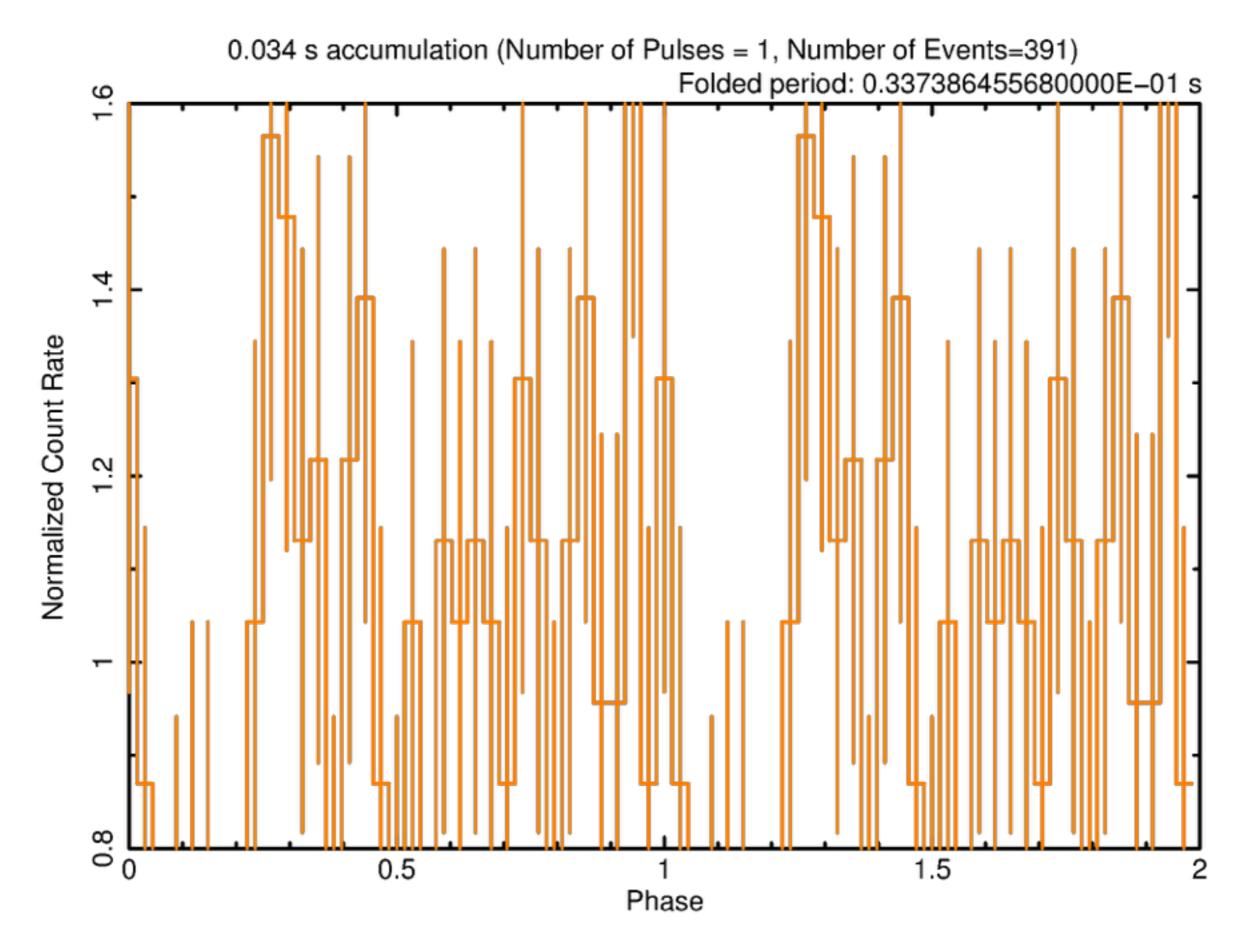
GRS 1915+105 Coordinated Crab & GRS 1915+105, 2017 Aug 9-10 60°N 30°N Ibaraki, Japan 0° Crab 30°S Canary Islands 60°S

2つの観測ターゲット(Crab pulsar & GRS 1915+105) を、2つの地上望遠鏡 (臼田の 64 m電波望遠鏡とカナリー諸島の Gran 望遠鏡)で、3軌道周期で観測

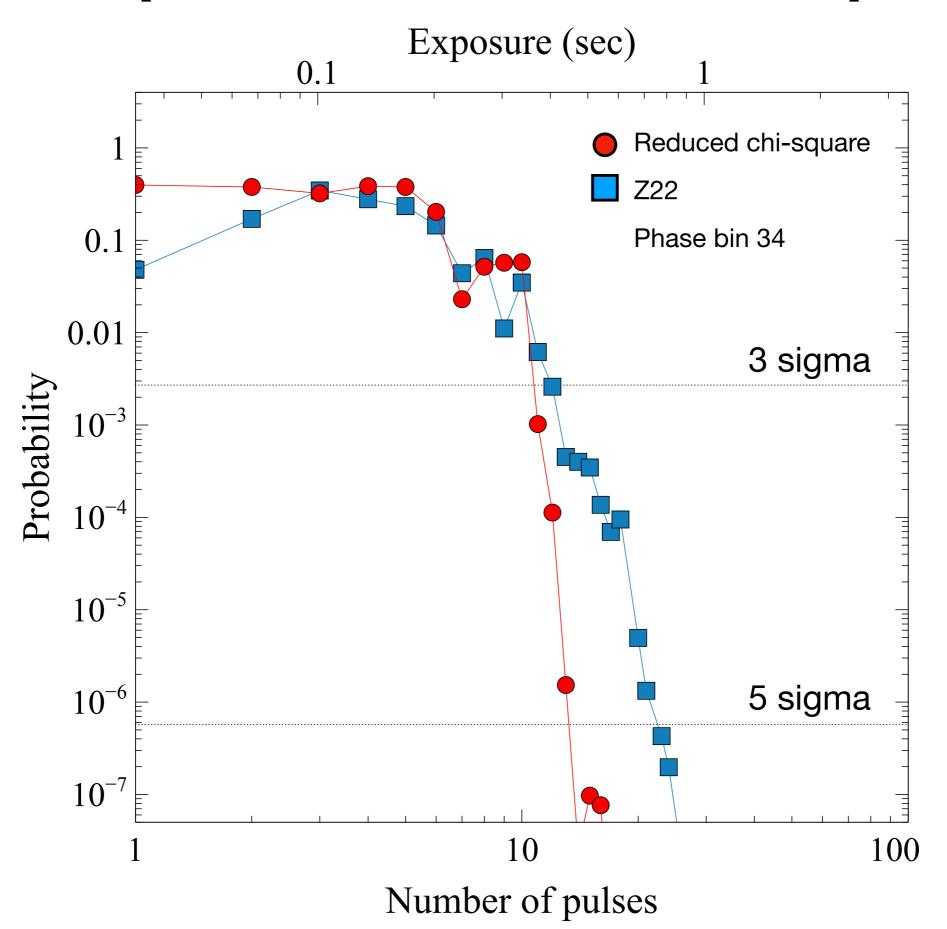
Crab Pulse Profile Observed with NICER



Crab Pulse Profile Observed with NICER

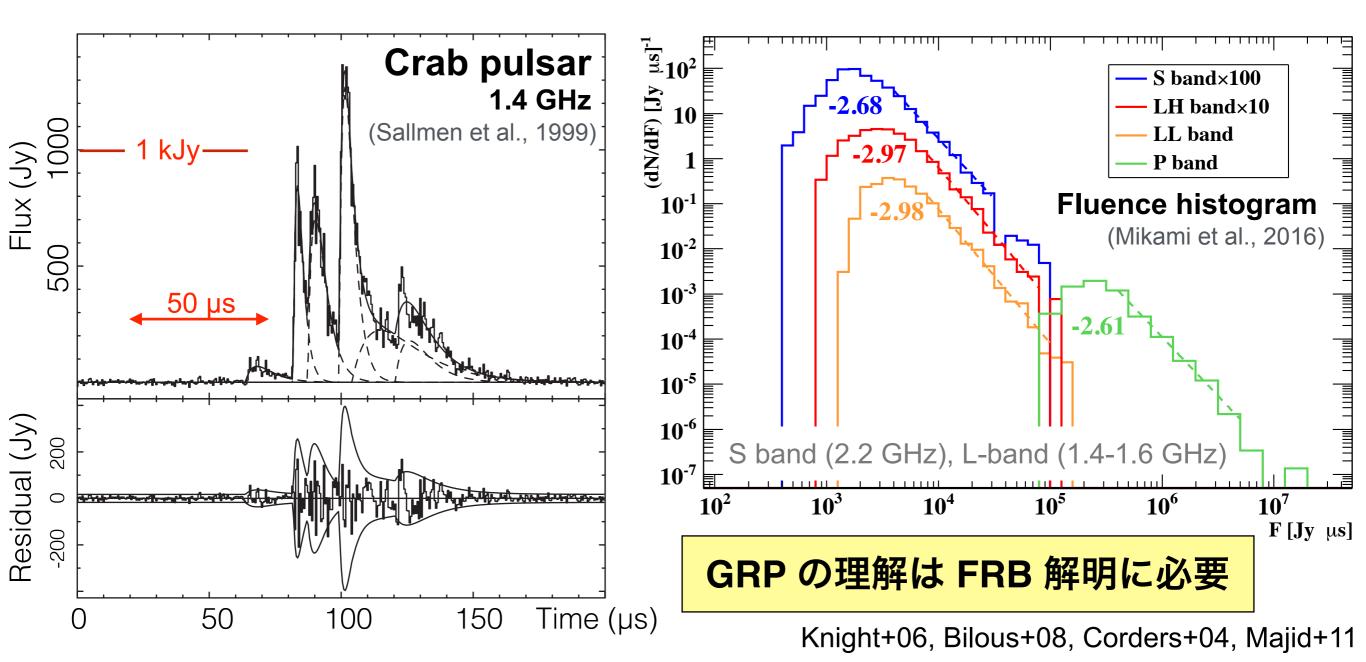


Short exposure to detect Crab pulsation

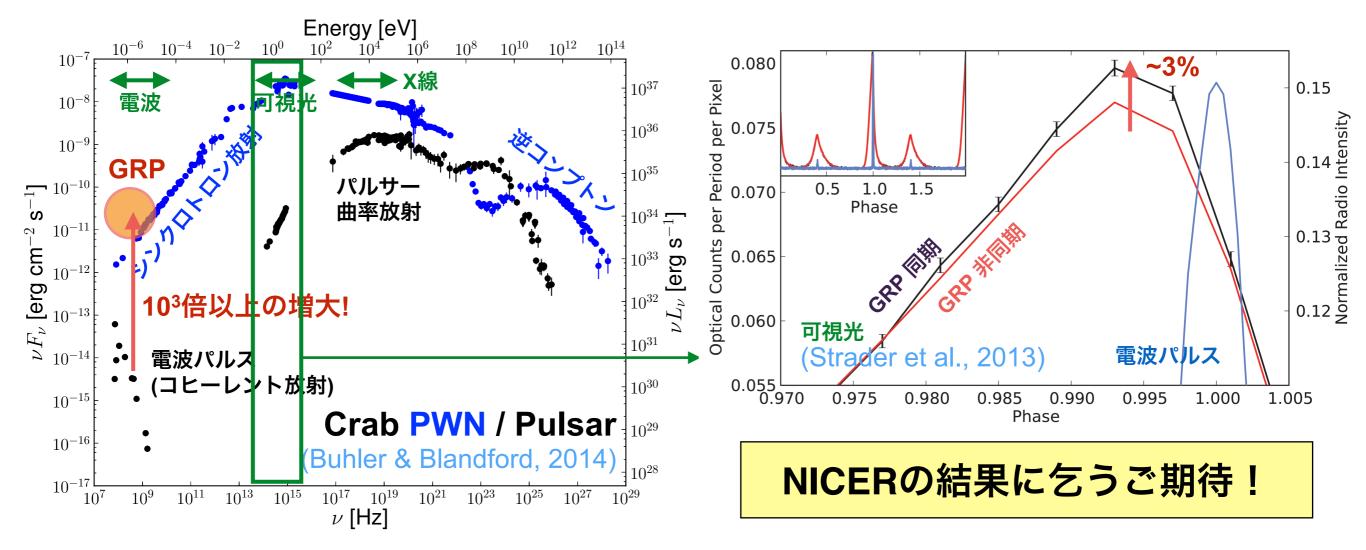


巨大電波パルス Giant Radio Pulses (GRPs)

- 巨大電波パルス GRP は通常パルスより 102-3 も強い。場合によっては MJy レベル。
- 知られている 2,000 個ほどのパルサーのうち、約 12 天体から検出されている。
- Main pulse か interpulse の位相でランダムに発生する。
- GRP のフルーエンスは、べき分布する(通常パルスは正規分布か指数分布)。
- GRP の発生機構は未解明。FRB が系外の若い中性子星の GRP の可能性もある。



Crab Pulsar GRP の多波長同時観測

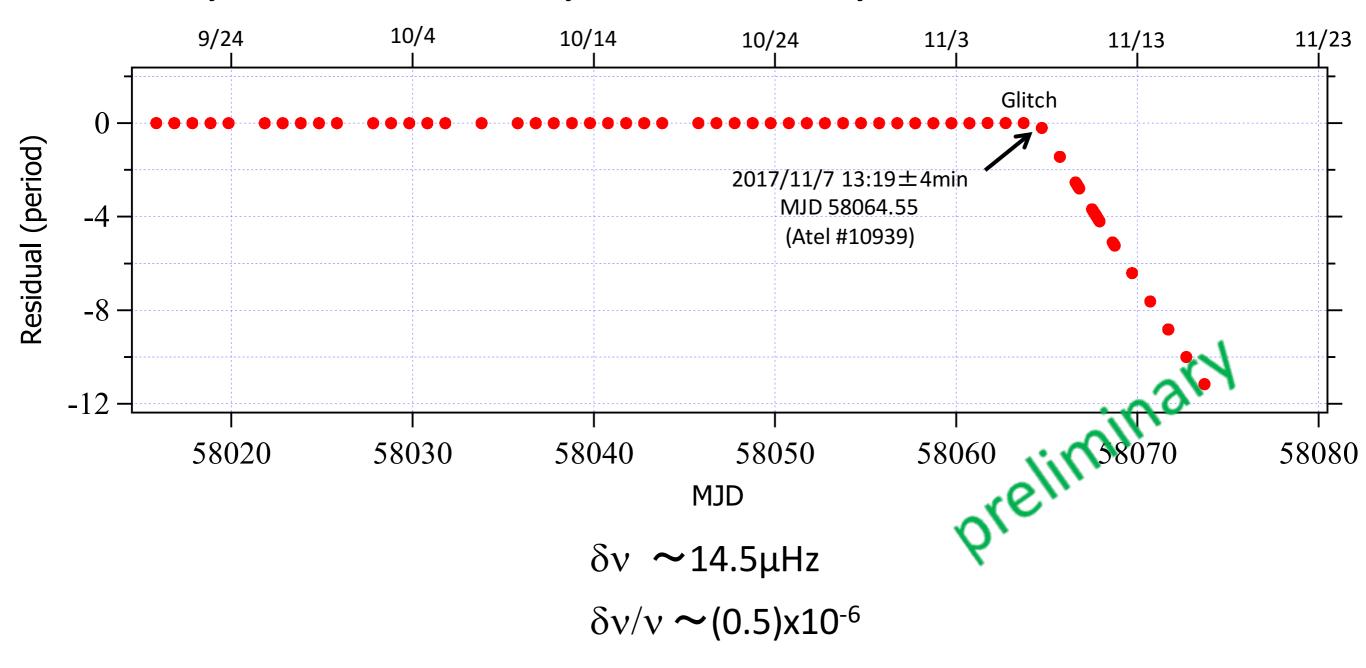


- かにパルサーの GRP に同期して統計的に有意(7.2σ)な可視光の増光(3.2%)を検出。
 - コヒーレントな電波放射とインコヒーレントな可視-X線放射が関連?
- X線以上の高エネルギーでは増光の上限値のみ。
 - Soft X-ray (1.5-4.5 keV): Chandra HRC-S, <10% (2σ) (Bilous et al., 2012)
 - γ-ray (50-220 keV): Fermi LAT, <400% (95% CL) (Bilous et al., 2011)
- NICER (0.2-12 keV)と電波望遠鏡(325MHz@飯館, 1.4GHz@鹿島)の同時観測を企画。

T. Enoto, V. Kaspi et al., White Paper, in prep, Shearer et al., 2003; Strader et al., 2013

Largest Glitch from the Crab Pulsar

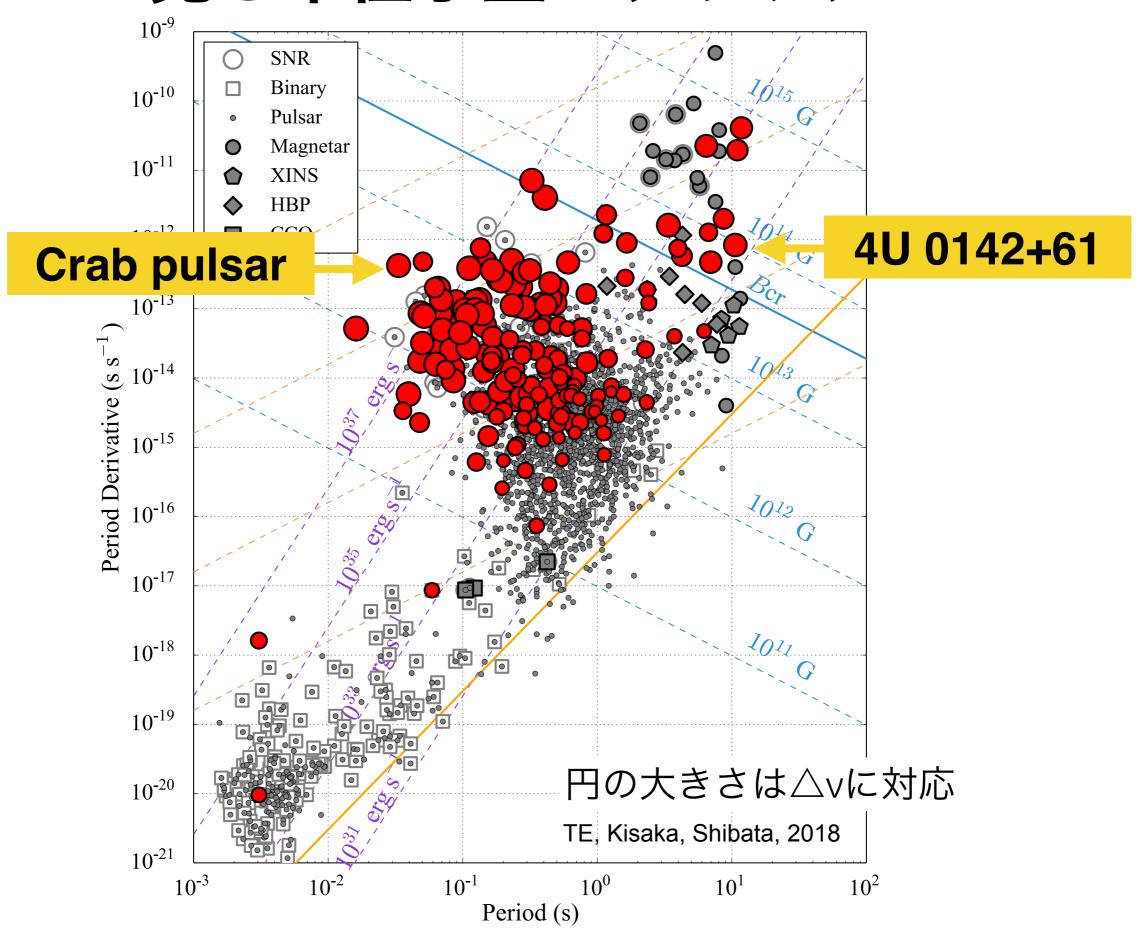
A Crab pulsar glitch detected in the data from Toyokawa observatory, Nagoya University and litate observatory, Tohoku University



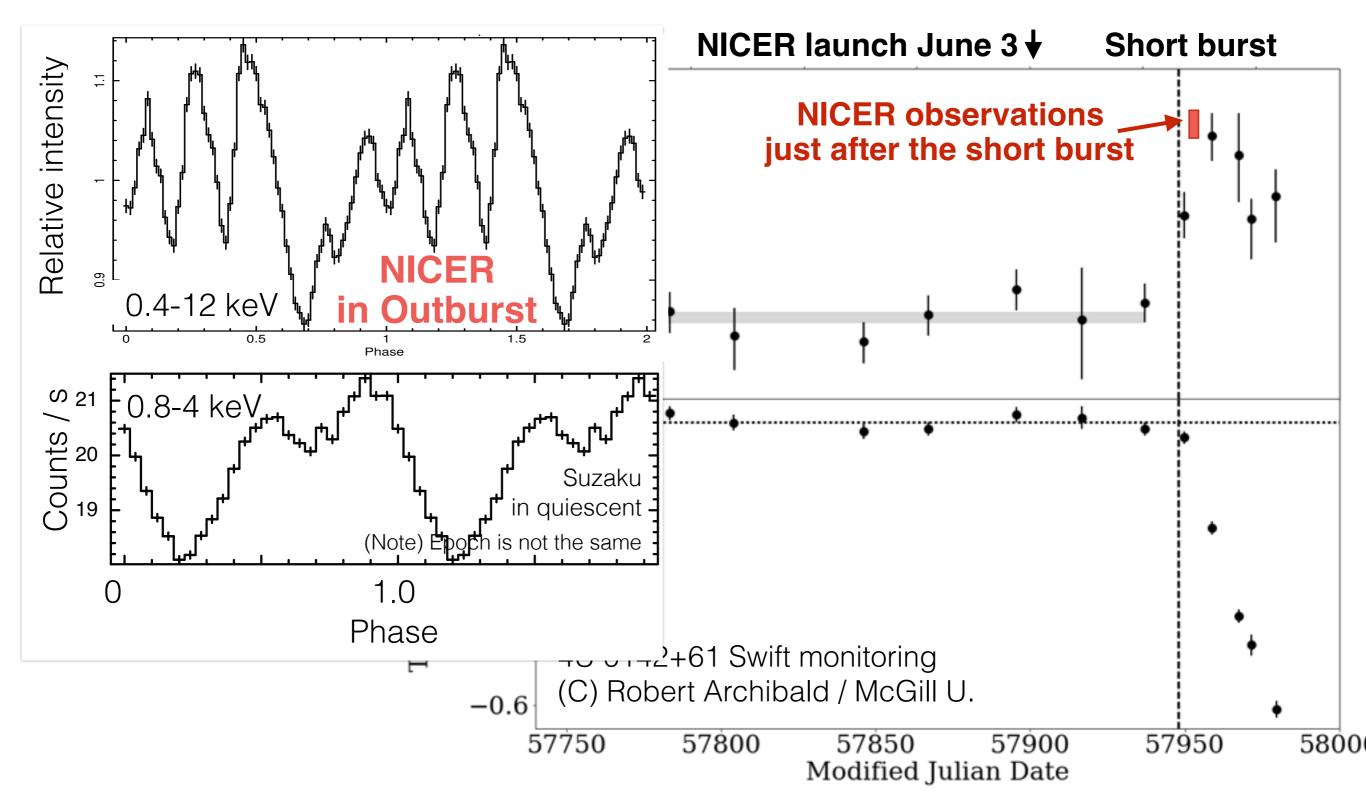
consistent with the Atel reports (10939, 10947, 11025) (We should refine the error estimation.)

Radio from Terasawa et al.

NICER で見る中性子星のグリッチ



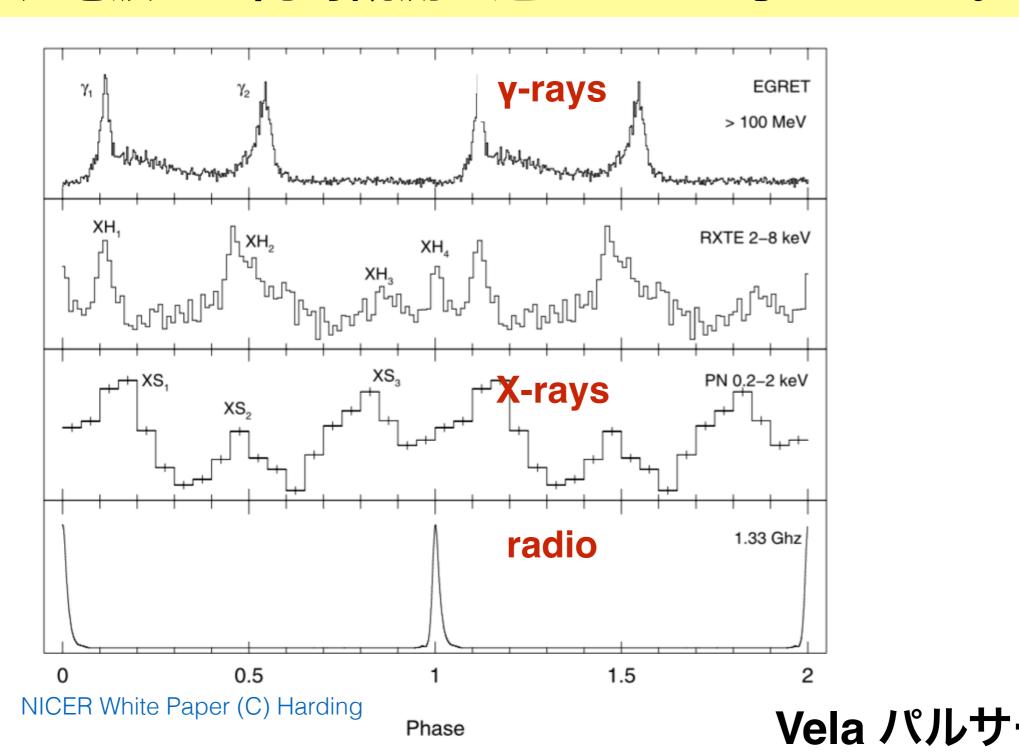
マグネター 4U 0142+61 のグリッチ後観測



- · Fermi GBM detected a SGR-like short burst at 23:54 UT on 13 July during the NICER's commissioning phase (GCN 21342).
- · Signature of a glitch around the outburst from Swift monitoring (Atel 10576)
- NICER follow-up ToO observations, ~0.88, 1.0, 2.0, 3.0, 4.0 days after the burst, from July 14 to 18 (total ~75 ks)

NICER によるマグネター観測戦略

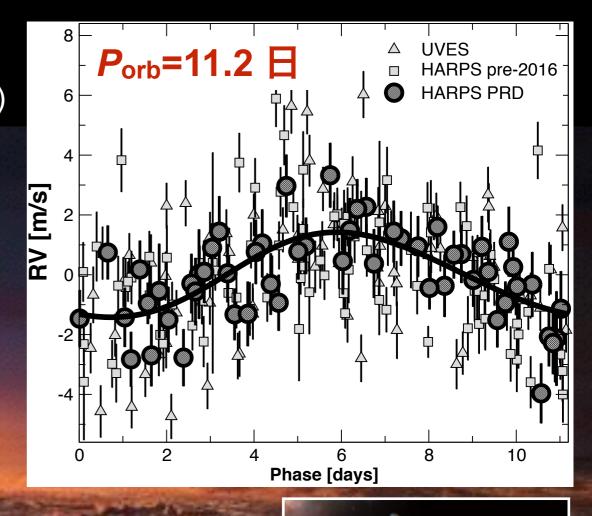
NICER の機動性(突発天体や他波長同時観測に柔軟に対応)を活かし、電波との同時観測を進めたいと考えている。



プロキシマ・ケンタウリにハビタブルな惑星!?

4.2 光年のお隣さんの星 (dM5.5e)

(Anglada-Escude et al., 2016, Nature)



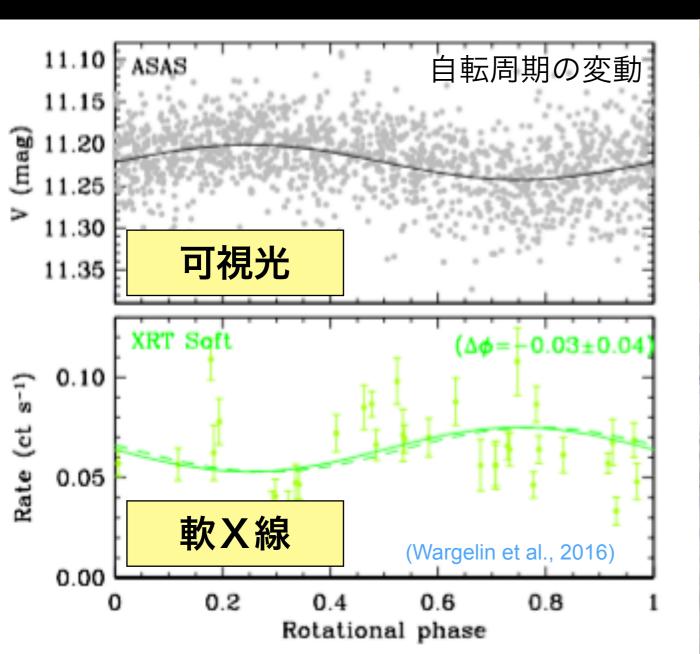
野心的なスターショット計画 ➡

Pale light from a red dwarf star
Proxima Centauri b : artist's illustration
by ESO, M. Kornmesser

L_x~L_{sun}, 0.05 AU → X線やフレアの影響?

近傍の星の磁気活動を長期X線モニタリング

- 中心星の可視光観測で周期性? 83 日(星の自転), 7年(太陽周期)
- 過去のX線観測は散発的: 可視光の周期変動と反相関との指摘?
- NICER 観測: 自転 83 日の 2サイクル分を 2 ks x 40 回でカバー
- フレアと静穏状態の弁別に、南天の可視光観測があると良い





まとめ

- 中性子星(パルサー)の発見から半世紀になり、多様な中性子星の 種族が見つかり、それらの進化経路の観測的研究が盛んになった。
- 中性子星の活動性の鍵は磁気活動であり、10¹⁴⁻¹⁵ G という宇宙最 強の磁場をもつマグネターを中心に多波長での観測が進んでいる。
- 国際宇宙ステーションに中性子星の観測を狙うX線望遠鏡NICER が設置され、大有効面積で高い時間分解能の観測を開始した。
- NICER によるマグネターなどの強磁場パルサー観測では、電波と X線との同時観測(+モニタリング)が新しい結果を生む。